

目次

一、卷頭の言

二、特別寄稿

一、卷頭の言

全日本学生合気道連盟

第六十期委員長 飯塚 浩祐

今年も例年通り、無事連盟誌を発行することが出来ました。

毎年、連盟誌は発行させていただいておりますが、今回の連盟誌は弊連盟が発足して六十年が経つことを記念し年に一度の記念号を発行致します。ここまで連盟誌を長い期間にわたり発行できましたのも、先生方のご寄稿をはじめ、各大学の皆様、スポンサーの皆様のご支援のおかげです。ありがとうございます。今回は記念号でより一層楽しんでいただける連盟誌になつてゐるかと思います。

まず、この六十年という節目の時期に連盟委員長をやらせていただけたこと本当に感謝致します。私は一年生の頃から連盟委員をやつておりますが、最初は大学の部活に所属したばかりでまだ何もわからない中、外部での連盟の活動をすることに不安がありました。ですが、ここで一步を踏み出し連盟委員として活動をすればこれまでとは違った経験や他大学の人達との交流ができるのではないかと思い、やることを決意しました。そんな私も気づけば幹部の代となり全日本学生合気道連盟第六十期委員長を務めさせていただくことに

なりました。

次に、私がこうして一年間、連盟委員長として活動できたのも同期の人達、連盟の後輩のおかげもありますが先生方や加盟校の皆様、何よりも連盟の諸先輩方が残してくださいました長い歴史があるからこそだと思います。正直、この一年は例年とは違いいレギュラーなことが多かった年で私が連盟委員長であったこともあり、皆様方には多大なるご迷惑ご心配をおかけしたことだと思います。そんな私一人では成しえなかつたことも皆様方のお力添えもあり、乗り越えることができたと実感しました。それと同時に今現在、この全日本学生合気道連盟も二十を超える、そして流派の異なる合氣道部の大学の方々に加盟していただいております。年二回、先生方や加盟校の方々とお会いする機会がありますが毎回、大人數で稽古をしたり、普段見られない演武を見たりすると合氣道を通じて繋がった縁なのかと思い連盟委員として活動してきた良かったと思います。このような大きな交流の輪のかで、活動できたこと、様々な経験ができたことに感謝致します。時代も平成から令和に変わり、代替わりもしました。良いところは残し、改善るべきところは変えていくというものが大きな組織を運営するのに必要なことだと思います。私が四年間で学び、感じたように後輩には連盟委員として活動できることに感謝をし、未来の連盟委員の人達に受け継いで

いけるようにこれからも頑張つて欲しいです。私はこの歴史のある連盟の委員長を務めたことを誇りに思うとともにさらに全日本学生合気道連盟が発展することを切に願います。

最後に、六十周年記念号の発行に際しまして、お力添えをくださいました、先生方、加盟校の皆様、各スポンサーの皆様に厚く感謝を申し上げます。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

平成己丑夏

德雲齋



山
水



二、
特別寄稿

田中茂穂先生

祝辞



令和の御代となつた銘記すべき賀年に、創立六十周年をお迎えになつたとのこと、洵におめでとうござります。

当連盟は、初代亀井委員長が同志とともに、「学生の、学生による、学生のための」との理想をかかげて発足した、わが国を代表する学生合氣道の中心組織です。

それから今日までの長年月、連盟に集う歴代の諸君による協心努力があり、この慶賀すべき年を迎えることが出来たのだと思います。

衷心より敬意を表します。

これからも、前記の理想を墨守し、益々発展されますよう
お祈り申し上げます。

求める」と

諸君が毎年開催する演武大会々場である日本武道館の、すぐ近くに靖国神社はご存在する。

申すまでもなく、靖国神社は祖国を護るために身命を捧げた英靈をお祀りする神社である。

この国家、国民を挙げてお祀りすべき神社に、平成の三十年間に何人の総理大臣が参拝したというのか。

国を護るために一命を捧げた御靈に、敬意を表することは世界の常識である。

この常識すら今やわが国では通用しなくなっている。諸君の努力によつて、異常なる国家から普通の国家へと、一日も早く轉換してほしいものである。

昨今は、百年、二百年に一度とも言われる激変、激動の時代となつてゐるが、わが国民は、未だ平和ボケから脱することが出来ない。

このような状態から脱するには、武士道精神の作興が肝要である。

連盟に集う諸君が、前記の理想を堅守すると共に、連盟が日本武士道精神再興の一大拠点となるよう、努力されることを期待いたします。

私事にわたり恐縮ですが、遙かの昔、学生連盟の結成を懇請し、創立後は、連盟が主催する行事のほぼ總てに参加することが出来たのは、大いなる岳こびであり、誇りとするところです。

連盟の諸君からは、終始、親切にしていただき、本当に有難いと思つています。

重ねて全日本学生合氣道連盟の益々の発展をお祈り申し上げます。

（令和元年八月記）

成山哲郎先生

全日本学生合気道連盟60周年記念誌に寄せて

成山哲郎

【第一部】

この度は全日本学生合気道連盟の創設60周年を迎えられましたことを心よりお祝い申し上げます。

毎年春の研修合宿と秋の演武会には昭和60年より参加させて頂いております。

稽古方法の違いを乗り越えて合気道の稽古生がお互いに技を研究して切磋琢磨することは、一人一人の技の幅を大きく広げることでしよう。また、学生という最も多感な時期に様々な考え方の人たちと合気道を通して触れ合うことは、人間的にも大きく成長されるまたとない機会です。

60周年を迎られ、次の60周年に向けて益々ご発展されますことを心より祈っております。



【第二部】

私は昭和41年より斯の道に入つて以来、今年で53年目を迎えます。この間には多くの皆様方との出会いがあり、合氣道は私の人生に於けるかけ替えのない四人の恩人との出会いを与えてくれました。

合氣道の素晴らしさと夢と希望、そして人生に於ける心の持ち方を導いて下さった富木謙治先生。

合氣道の楽しみ方とその考え方、そして何よりも人と人との繋がりの大切さを伝授下された大庭英雄先生。

合氣道の技の極意とその奥深さ、そして指導の場までも与えて下され、男としての生き方をも示して下された小林裕和先生。

そして富木先生への敬慕から昭道館道場を創設、発展させて下さり、時に挫けそうになる私を物心両面から支えて下さり、温かく見守り続けて下されたのが、昭道館初代理事長内山雅晴先生であります。

今となつては故人となりましたが、この四人の先生方の相互の出会いがなければ、昭道館もなく、勿論私もなかつたことを思ひます。人の一生でどれだけの人と出会い、どれだけ

触発されるかということは、正にその人の生き方を方向付けるものではないでしょうか。学生の皆さんには大いに仲間と語らい、先生、先輩方の指導を仰ぎながら多くのものをそこから感じ取り、自らの血肉にして頂きたいと思います。

【第三部】

創設60周年を迎えた全日本学生合氣道連盟の一一番の強みは、組織を超えて様々な稽古方法を行う団体が一堂に会した連盟であるということです。

この多様化した社会にあつては偏狭的なものの見方ではなく、他を尊重する姿勢こそが必要です。しかし同時に自らの信念を持つてことに臨まなければ何事も成し得ないでしょう。

昭和45年春、大阪へ斯道普及のため旅立つことになつた私は、恩師である富木謙治先生から直筆の揮毫を拝領しました。そこには「和而不同（和して同せず）」と書かれてありました。この揮毫は合氣道を生業とする道を選んだ時の原点であり、そしてその延長線上に今の私もあります。

以上

松尾正純先生



1、祝辞

全日本学生合気道連盟が60周年の記念すべき年を迎えたことを心からお祝い申し上げます。

「所属組織の違いを超えて交流する学生の、学生による、学生のための連盟」を目指して活動を続けてこられた多くの先輩の方々、今までに活躍されている現役諸君を称え祝賀致します。

また60年にわたる連盟の歴史は明治神宮至誠館名譽館長田中茂穂先生の文字通り至誠のお力添えの賜物と思料し感謝する次第です。

私事で恐縮ではありますが、海外の合気道稽古生たちとの長年の交流に際して、私は連盟の理念を重ね合わせて活動してきたという点で、連盟のお蔭を蒙ってきました、ありがとうございます。

日本発祥の合気道普及の一端に連なっている私は、多くの先生方、先輩方、仲間たち、稽古生たちから合気道を通じて授かったこの幸運をかみしめ、お返しする術を考え、自分なりに実行し日々を過ごしております。

日々稽古を含む学生生活に打ち込まれる諸君が、今あるすべてをあるがままに受け入れて楽しく過ごされるよう心から願い、全日本学生合気道連盟の益々のご発展を祈念致しま

す。

2、「構えの大事」

構えが大事、と入門当時厳しく言わましたが、それほどのように具体的に有用だからなのは長らく私には理解できませんでした。

ここでは構えの有用性を、受けに片手を持たれた場合（持たれた稽古であれば胸、肩、両手、すべてに通じます）を例に考えてみます。

構えたままで受けに手を取らせるのは、受けは取り難いので、取り易いように「構えを崩したかたち」で受けに持たせますが、この後「構え」を使うことで「崩し」を入れます。「構えを崩した」かたちを一瞬「構え」に戻してから技に入るので、別段変わったところは見えませんし、受けにも感じさせない所がミソです。

腕の脱力状態を利用して構えに戻ることが出来るかがポイントですが、今までの経験では、ほとんどの方はこの瞬間脱力できず、力が入って引く動きになるため、他からは見て取ることが出来るし、受けはその動きを感じることが出来て「崩し」を入れることが出来ません。

片手を取られてからの動きを他から見ていると、この崩し

の動きはないのと同じで普通に技に入るよう見えるため不思議に感じられ、しかし技は効果的に掛るのです。

3、これから全日本合気道連盟に求めること

3-1 インターネットを介して世界が身近になった現在、東京辺の大学だけで連盟運営する形を改善する工夫はできますか？

3-2 最近京都産業大学合氣道部が合同交流稽古計画

を立て、関西8大学（京産大以外は合気会指導師範）で合同交流稽古を京大道場で行うことになりました（直前になつて6大学は都合が悪くなつて、京大、京産大だけの交流になつてしましましたが）。

連盟大学同士の交流は勝浦合宿、武道館演武大会だけというのも芸がなさすぎ感覚が私にはあります。

「したくない」とする気分は無いと思いたいですが、積極的に交流するという気分は無いように感じてしまいます。

「道場・流派の違いに左右されない学生合気道の発展に寄与する」理念に従つて連盟以外の近辺の大学に働きかけることを私は勧めますがいかがでしょうか？

結果の如何に拘わらず、京産大の行つたような積極的な交

流の試みに挑戦することは加盟大学を増やす結果につながるかもしれませんね。

(東大京大合同交流稽古、京都で行われる時は京産大も誘ってください)

みなさんの大学合氣道部員としての短い時間内で、若さを武器に、沢山ある選択肢からの積極的一步を踏み出すことを私は望みます。

京都産業大学体育会合氣道部師範 松尾正純

松尾千津子先生

祝辞



六〇年の長い年月、連綿と受け継がれて来た全日本学生連盟を、これまで支えられて來た学生の方々に感謝の念を捧げます。

何事も最初の意気込みは勢いがありますが長い年月続けていくに当っては熱意と献身があつたからこそであり、歴代の幹事の皆様、学生諸君に、お礼を申し上げます。

日々の研鑽を積む事は大事ですが、それを受け継ぎ持続発展していくには、大きな力が必要です。これからも貴連盟の活動を見守りつつ、益々の発展を、お祈りしております。

自由原稿

合気道を始めて今年で丁度五〇年になります。途中、出産育児で十年程お休みしましたがそれにしても長い年月がたちました。

稽古が好きで体力が続く限りいつまでも練習に励んでいた日々のある日、寺田先生から「そろそろ教えなさい」と言われました。「先生厭です、稽古させて下さい」と答え前より熱中して練習を続けていたら、あの温厚な先生が少し怒った声で「指導も大事ですよ」と諭すように話されたので、そ

れから止むを得ず教える事になりました。教えるには何故この技が成り立ちどういう風に練習すれば効く技になるかを分らなければなりません。試行錯誤の日々を経て、指導する事により技の理解も深まって行き、大勢の方々と交流し様々な国々の人々の合気道に対する熱い思いも共有する事ができました。

私も七〇代になり、年令と共に筋力もスピードも衰えて来ているのを感じています。後どの位合気道ができるかなと模索中の昨今です。

これから全日本合気道連盟に求める事

三月の連盟合宿に始めて指導に行つた日から二〇年程たちました。館山の武道場の畠半分以上、学生が溢れていた日々から時が移り今年の合宿稽古では、学生の数が少なくなり列の伸びも随分短くなりました。二〇年の月日の長さと合氣道を習う人数の減少を、ひしひしと感じた一日でした。

合気道は（前倒、後方、前方、後方回転、入身）と全方向に受身をします。とつさの時に身を守る術を知つてゐる事は、これから時代を生きていく人には大切な心構えだと思います。また合気道は相手がかけた技に応じて身体を捌いていく武道ですので護身の技も多くあります。心と身体は表裏

一体で武道を長く続けていく事により精神力も強くなっています。こういう利点を生かして、これから的学生連盟を支えるには、やはり部員の数を増やす事が必要です。入学時の演武、護身講座等、今まで部員獲得に向けた努力を更に練りあげて部員を増やす努力を続けて下さい。年一回の演武会での交流だけではなく各大学との交流を深める事も有意義な事だと思います。東洋英和は女子大ですので、なかなか男性と練習をする機会に恵まれません。今まで交流があつた大學は明治学院、明治、専修、拓殖、京都産業、横浜国大と合同稽古をしました。京産大、明治の学生の方々とはロシアボーランドへの指導に行く際にも同行しました。合気道の交流を通じて各国の合気道事情に通じるのは学生時代の得がたい経験になつた事でしょう。

これから連盟に求めるのは年一回の大会で各大学の合気道を見学できる機会があるので、ご指導されている師範、コーチの方々にも相談されて、様々な学校と自由に稽古をし、内外に開けた交流が増える事を願っています。

志々田文明先生

志々田 文明
日本合氣道協会 師範



第一部 祝辞

全日本学生合氣道連盟発足60周年、おめでとうございます。本連盟の創設にかかわった方々、育てられた先達の先生方、並びに学生の皆さんに敬意を表します。

本連盟が、さらなる発展を遂げて成長していくことを祈念致します。

さて、この機会に合氣道の基本稽古内容である間合いの問題について考えるところを述べ、皆様の参考に供したいと思います。

*

1968年、筆者が、早大合氣道部に入部して習った練習の一つが「手刀合わせ」であった。練習相手と互いに手刀を張って、指を立て、相手の正中線上に向ける。その構えと距離を維持しながら前後に、また左右、八方に動くのがその方法だ。手刀の接点で感じられる触覚で、相手の動きを察知して対応するのである。結構難しい。この練習は、剣術において、木剣をして対峙した二人が、互いに中段に木剣を構えて、機を見る心を修行するのと同じだ。

「手刀合わせ」の次に「掌底合わせ」の稽古がある。これ

は統一力で、押されない練習だが、その意味を知らない人も多い。その誤解の影響を受けて、「手刀合わせ」で押し合いをする人もいる。「手刀合わせ」は実は崩されない練習なのである。

この次の基本稽古が、「手刀の崩し」六本、後ろ取りを入れて八本である。「手刀合わせ」の間合いを維持している一方に、他方が攻撃を仕掛ける時に「崩す」のだ。これらは一様に「体捌き」の基本練習である。富木謙治先生は体捌きを重視したが、それも当然で、植芝盛平先生は間合いを見切つて見事な体さばきをやっており、また柔道の嘉納治五郎先生も同様であった。基本の中に極意があるのである。

第二部 「自由原稿」

人に優しい武道……武道史とホモ・サピエンス

平将門の時代の武士を「兵」（つわもの）と読んだ。兵の原意は武器であり、武器を帯びて戦に出るのが兵だ。武士は「さぶらい（侍）」、「もののふ（武者）」、武家とも呼ばれた。有力な武士は武芸・武勇を職能として天皇や権門勢家に仕えてそれを支える集団であつたが、平清盛、源頼朝に至つて権力を握り、頼朝は鎌倉幕府を開いて、以後700年に亘る武士の時代を築いた。

武芸は人に向かう刃であるが、その行為は相手の刃を自分に向けさせるため、武士は絶えず死に対する覚悟に迫られる。鎌倉期の有力武士は心の動搖を抑えるため禅の修行に活路を求めた。沢庵から禪を学修した柳生宗矩（徳川將軍家兵法指南役）は『兵法家伝書』で「殺人刀・活人剣」の思想を著した。宗矩は同書で、万人を生かすためには活人剣を振るう場合があるとして、平和の江戸時代における武士の役割を述べている。武芸と思想を武家の政治の下で正当化したのだ。この時代、武芸は治安維持と戦争の備えに機能した。

しかし明治近代を迎えると、西欧の重火器の前で、旧来の弓馬刀槍の武芸と兵学における運用法が無力であることを

悟る。明治10年の西南戦争は、白兵戦における剣術の有効性を認識させはしたが、武芸はもはや近代的な軍隊における主務ではなくなる。活路は警察官の教育と学校教育との二つに求められた。後者は、国会請願運動の努力によって明治末年には撃劍（剣術）・柔道が学校教育に導入されることによる。

大正期の中頃から撃劍（剣術）・柔道ら各種武術の総称として武道という用語が用いられるようになる。以後、武道と日本の思想との関係が研究されるようになつた。武道とは、仏教、儒教、老莊思想、神道等の宗教の影響を受けてきた武士階級が担つた、武術・武芸の技法と心法を受け継いできたという説明である。実際、禪は日本人の心に深く内面化した仏教の慈悲の思想を受け継いでいる。

近代になつてそれらの思想に重畠したのが欧州出自の人間中心主義の思想、人間性を尊重する思想である。明治指導者は、剣術や柔道で人を怪我させるようでは、西欧から文明国として認められず相手にされないと考えたのだ。柔道の嘉納治五郎翁はこれに応えて、相手を投げるわざと当時に「受け身」を教え、相手の安全を確保するよう徹底して指導した。この思想は他の武道にも取り入れられ、合気道における受け身となる。武道の技で相手を怪我させないことを徹底させるためには、慈悲の心に加えて強力な精神が必要だったといえよ

う。日本人も西洋人もともにホモ・サピエンスであることからすれば、両者の生み出した「人に優しい」思想を享受できるのは当然なのだ。民族間・宗教間の対立が未だに見られる今日、大きな心で武道を育てる必要がある。

第三部 「質問～これから全日本学生合気道連盟に求める」と～

本連盟が年に二回の行事を継続して実施していること、また、それにおいて丁寧で誠実な対応をしていることについて、見事なことと感心しています。それは、教室や道場で学生と接していると、わずかながらも時代との考え方の変化が感じられるからです。そうした中、一つの行事を不易なものとして継続することは大切なことです。

一方で、何事もすべてがルーティーン（routine）となることによる弊害は生じます。誰でも多忙ですから、変化を求めずに大過なく行事を済ませばよいと考えるものです。「何が求められるのか」という問いが、変化への問題意識であるとすれば、「どうしたらよいのか」は話し合いによるしかなりでしよう。

「物事が大きく変わる」この時代において、連盟のあり方を考える一助として、他の武道の連盟は何を、どのようにやっているのか、を学ぶことも大切でしよう。

結局、情報収集と話し合うということになると思します。

大森竜一先生

「祝辞」

(NPO) 昭道館合氣道連盟・東日本合氣道競技連盟師範
大森竜一



全日本学生合氣道連盟発足60周年、誠におめでとうございます。60年という長きにわたり、流派という垣根を越えて当連盟が歩み続けてこられましたことに心より敬意を表しますとともに、今後も益々発展されることを祈念いたしております。

当連盟との関わりについて思い起こせば、初めて合宿に参加させて頂いたのは学生時代でした。師範の荷物を両腕の上に乗せ、拷問ともいえる姿勢で勝浦駅から研修センターまで歩いたことが今となっては懐かしい思い出です。それから十以上たってからでしょうか。成山師範の受として武道館演武に参加させて頂き、更に四、五年後からは取として技を披露させて頂くようになりました。そして現在に至るまでには多くの先生方と出会い、悲しくもお別れしてきた方もいます。60年には遠く及びませんが、私の関わりの中にも心に刻まれた歴史が存在しています。武道館での演武会、勝浦研修センターでの講習会など、微力ながら当連盟発展のお手伝いができれば幸いです。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

「乱取稽古の推奨」

一般的に試合がないのが合氣道であると言われております。さて、合氣道に試合が在るか否か、試合が必要か否かについては別にして、

乱取と試合は別物です。私の解釈では、乱取は自由意思による形稽古という位置づけになります。経験上感じていることは、形式的な形稽古ばかりを行つていますと、受は綺麗に投げられることばかりを追求するようになり、取は受との調和ばかりを気にするようになります。演武会や演武競技において審査員を騙す程になればそれはそれで評価に値するのかもしれません、見る人が見れば技の中に嘘偽りがあることは武道として滑稽に見えてしまいます。仮に技の理合いを表現するにしても、受と取の間に真剣たる攻防がなければ生きた技とは言えません。

もちろん、乱取稽古を行わざとも生きた技を身につけられた先人はいます。成山師範の師匠の一人である故小林裕和先生（大阪武育会師範・合気会）もそのお一人で、幸いにも小林先生の技を受けさせて頂いた際に本物の技を味わうことができました。若気の至りで抑えられた状態から悪戯に逃げようとした瞬間のことでしたが、緩やかな抑えから一転して統一力の備わった力強くて鋭利な刃物のような力が私の肘

めがけて駆け巡り、一瞬折られたと思ったことを鮮明に覚えています。ご存知のとおり合気会の稽古法に乱取稽古はありませんが、それでも本物と呼べる域に到達される方はいるわけです。

話を戻しますが、では何故乱取稽古が必要かと言いますと、乱取稽古法が生きた技を身につける早道だからです。受が自由意思をもつことで倒されることに徹しない場合、取は勝機を捉えて投げなければならず、また統一力の備わった技でなければ途中で逃げられてしまいます。乱取稽古では受は段階的に攻撃の速度を増すようにし、また防御の強さも調整し、攻撃のタイミングも不定期に行います。この本来技を掛けるに必要な事を稽古できるのが乱取稽古の良いところであり、乱取が試合とは異なり、形稽古の範疇である所以です。勿論乱取稽古ばかりに重点を置いてしまうと、本来の形からかけ離れたものにならないとも限りませんので、元の形での稽古も併せて行うことが重要になります。

昭道館合氣道の生みの親である故富木謙治先生は、形と乱取は車の両輪の如く行われなければならないという言葉を遺されています。考え方は人それぞれだとは思いますが、これを機に乱取稽古に励んでいただければ幸いに存じます。

「学生に一言」

何事にも真剣に取り組むことを忘れないでいただきたい。これから的人生において、今まで以上に数々の障害があると思います。その際逃げないようにしてください。正面からぶつかることが厳しければ、逃げるのではなく遠回りをしてください。急がば回れという言葉もあります。目標を見失わなければ、いつかは必ず到達できると信じて行動することが大切だと思います。今できることを一つ一つ精いっぱい頑張りましょう。

山田高廣先生

祝辞

連盟創立六〇周年誠におめでとうございます。流派を問わず集まつた各大学の合気道部の学生主体の活動が、このように長く続いたことは誠に意義深いものがあります。歴代の関係者各位の献身と努力に敬意を表すとともに、今後とも着実に発展をしていかれることを祈念いたします。

文化としての武道

小生が、昭和四一年（一九六六年）、大学に入学して稽古を始めてから半世紀以上経つ。一生やることにならうとは、始めた時には自分でも思っていなかつた。興味が続いたからというのが一番大きいのは当然だが、底流にはそれを支える思いがあったからと感じていて。

小生は文系の人間で、学部は法学部であるが、そこで教えられていることの中に、違和感を覚えることがあつた。例えれば、憲法の講義で人権条項について、その重要性を強調するあまり、これらの条項を時空を超えた科学的真理のごとき物言いがあつた時、人権が大事なことは当然だが、それは歴史の中で形成されてきた価値観の表明であろうと、軽い反発を感じたものである。



また、当時は大学紛争の最中で、マルクス主義が大きな影響力を持っていて、ヘルメットをかぶったオルグの学生が、マルクスの資本論を酔ったように読んでアジ演説をしていました。当時著名なマルクス学者向坂逸郎の資本論の解説書には、マルクスを真理を体現した教祖のように扱っていた。マルクス主義は歴史世界の法則性を解明したように主張したのであるが、承知の通り、その後の歴史はそれとは異なり、権威は無残に失墜した。

一九七〇年代以降はつきりしてきたことは、社会人文科学の理論は自然科学のそのような普遍性は到底持ちえないということである。それが出来た地域の歴史・文化・風土に縛られるので、他の地域への安易な適用はできない。明治以来の近代化路線は、しかたないことであるが、欧米で出来た概念を輸入して社会の仕組みを再編成することに急いで、輸入概念の批判的吟味は不十分であった。それでマルクス主義に典型的に見られるように、理論の創始者を教祖の無謬性の地位において、違う文化風土を無理な概念操作で解釈しようとするから失敗したのである。小生の学生の頃はその傾向が今よりずっと強かつたので、半分は勉強しない自分への言い訳であるが、未熟ながらも違和感を感じていたのである。

これに対して、何気なく始めた武道には、我が国固有の文化であることは自明であるから、そのような概念は生じなか

った。それに加え、肉体を使って知ることは、頭で知る以上に充実感がある。身をもって知ることの強みと深さである。問題はどのような稽古をするかにある。

小生の稽古する合気道と剣術は型稽古が中心である。型稽古は、ある意味仕手と受けが示し合わせて、技を練磨するので、やり方次第で形骸化する。よくある、効いてもないのに、受けが技に合わせて習慣的に受けをとるような稽古である。江戸期には、いたずらに技の数を増やして、それを外形的に覚えてよしとする剣術を華法剣術といった。華やかだが内実がないという訳である。そこで、江戸中期以降、それを補うために、防具をつけて竹刀で実際に打ち合う稽古が始まっている。現在の剣道につながっているのである。

しかし、武道稽古の初期は型稽古から始まっている訳で、その中で名人達人も出ているのである。当時は、戦さが行われ実際に参加している者たちの気構えが、型稽古の欠点を補つたということであろう。江戸期の平和が華法を生んだのだが、それを補うはずの竹刀稽古も別の形骸化をもたらした。幕末期には、五尺や六尺といった矢鱈長い竹刀が流行ったのであるが、軽い竹刀だから使えるので実際の刀ならばつかいこなせるわけがない。そこで竹刀は三尺八寸に統一され今の剣道になつて行くのであるが、それでも刀の常寸とされる二尺四寸と比べる五割以上長い。これに加え打突の部位の制限

等の試合ルールもあり、剣道の竹刀操法は、日本刀の操法とはかなり異なっている。また、道場の稽古は、平に整備された板の間や畳の上で行われるが、戦場ならあり得ない。このように武道の稽古は、真剣勝負以外は完全な実戦性はないのである。だから、どの稽古方法が優れているかは一概にいえない。竹刀稽古が優勢になつた江戸後期でも、一刀流の寺田宗有は組太刀一本で名人といわれた。ある時、竹刀派の者に立ち合いを申し込まれ、防具もつけずに相手をし、勢い込んだ相手が打ち込もうとする度に、そう来るならこうするぞと声をかけるので、相手は居竦んでしまつたという。型稽古でも、相手の意図までも自然に見抜き適切に技を施すという、身心一如の集中力を身につけていたのである。

この過程は短期間では実現せず、時間がある程度かかる。精神と肉体を集中させて物事に取り組むことを、我が国では修行（業）という言葉で捕えてきた。武道に限らず、いろいろな職人技・各種の芸能・茶道・書道に励むことも修行である。多くが向上をもとめて一生続く道となる。

武道が代表的ぎようじとされたのは、我が国では、武人である武士が統治者になり、その鍛錬法とされたからである。科挙を通った文官優位の中国や朝鮮では、我が国程武術・武道はおもんじられてこなかつた。長い戦の歴史の中で、武士は自他ともに許す武人であることを目指した。こけ脅しはすぐ鍛金が剥れる。実力が全てである。そして各人がそれを目指すから、武士は各自それなりの誇りを持ち、相手と対するに慎重である。武士に二言はないという言葉がある通り、言動にも注意を配つた。このような対自的な精神の在り方が武士道である。武人よりも統治者の役割が強まつても、この精神は基本的に変わらなかつた。中身を大事にし、自負の心を持つるよう励み、それを持つ相手を尊重する武士道を表す言葉が、誠である。誠は、実であり、信である。

かくして、武道という言葉は、他国の武術にはない、独特の精神性を帯びるようになったのである。しかし、繰り返し

になるが、稽古を通じて精神にまで及ぼすに至るには、誠を持つて地道に修行を積み重ねていかねばならない。言葉だけで精神性を云々するのは、形骸化の最たるものであろう。詰まらぬレトリックにとらわれず、稽古に励み身心の集中のレヴェルが上がつてくれれば、稽古が終わつた時（特に一人稽古）、清明心が湧いてくる。身心一如への第一歩であろうか。

最後に、スポーツとの関連について述べておきたい。現在、武道をスポーツの下に置く考え方が一般的である。特に、試合形式を取り入れた種目に顕著である。この場合、スポーツとオーバーラップするところがあるのは、確かである。しかし、上に述べた通り、スポーツ概念では包摂できぬ部分の法が武道概念の本質をなすのである。術の修行の果てに道に至ることを目指すからである。

連盟には、様々な稽古方法で行う大学が参加している。互いに切磋琢磨して、武道文化の継承発展に寄与していただきたいと思う。

佐藤忠之先生



第一部

新元号「令和」幕開けの年に、全日本学生合気道連盟の創立六十周年が重なりました。この喜ばしい巡り合わせに心より祝辞を申し上げます。さらに重ねまして、これまで連盟を温かく見守られ、ご支援、ご指導なされて来られた諸先生方の御努力と御高徳に改めまして敬意を申し上げます。学生による自治と言う伝統が今日まで絶える事なく継承されてきた六十年の歩みこそは大いに胸を張るに相応しい連盟若人の誇りと言えましょう。いつの時代にも若人たちによる意識萌芽の姿は誠に頼母しい限りであります。その頼母しい姿に心より拍手を贈りたいと存じます。御目出度う御座います。

早稲田大学合気道部師範 佐藤忠之

第二部

「合気道の武道性を考えてみる」すすめ

そもそも、武家時代の武術とは、必須芸として平素から武士がその身に備えて然るべき技術でありました。当時は、刀剣術から弓術、馬術、泳術、槍術、薙刀術、鎖鎌術、柔術、さらに忍術などに至るまでが混交未分化状態でしたから、それらを広く総称した技芸を武芸と呼んでいたようです。

江戸時代には武芸十八般と謳われたそれらですが、時代は移り、現代では各武術はさらに分化し、術たる実技から入つてのちに深く精神性を求めると言う人格形成色が強く求められるようになってきました。国内外を問わず現代社会に於いて、武道はスポーツとは違った、むしろ日本伝統教育文化として高く評価されています。現代の民主主義の教育的価値観からの武道への期待もそこにあるのかもしれません。

そうした趨勢論はさておいて、合気道の形態にも近代化競技化しない従来型の古流形態と、柔道、剣道のように近代化、スポーツ化、競技化への道を踏み出した二つの流れがあります。この二つの個性のうち早稲田大学合気道部は後者に入りますが、いずれの立場にせよ究極は人間形成へ教育的追求がその基盤にあります。

酒井進之介先生

全日本学生合気道連盟60周年記念誌に寄せて

酒井進之介



【第一部】祝辞

この度は全日本学生合気道連盟の創設60周年を心よりお祝い申し上げます。

60年という長い歳月の中で偉大な諸先生方が脈々とご指導され、支えてこられました本連盟の歴史は、正にこれを発展させようとする学生諸氏の不斷の熱意によってここまで歩んでこられたものと、深く敬意を表します。これからも末永くご発展されますことを心よりお祈り申し上げます。

【第二部】自由原稿

今から25年前、まだ私が学生2年生の時に初めて全日本学生合気道連盟の研修合宿に参加させて頂いた時のことはとても印象に残っています。

当時の先輩方も大学を代表してきているという、ある意味で張り詰めた雰囲気がありました。合宿所ではこれまで全く

知らない他大学の同期と同部屋で起居を共にし、いろいろと思ふことを言い合っていたのも懐かしい思い出です。

そして指導をされる先生方の技はとてもシャープでした。が、厳しさの中には学生に対する温かな眼差しも感じました。本連盟が末永いご発展を遂げられることを心より祈願しております。

「温故知新」とは申しますが、良き伝統を守りながら時代に合わせていくことで、本連盟に所属される学生が益々充実して合気道を稽古され、毎年春の研修会と秋の演武会に臨まれますこと、そしてその参加される学生の熱氣で益々のご盛会となりますことを願っております。

以上

【第三部】これから全日本学生合気道連盟に求めること

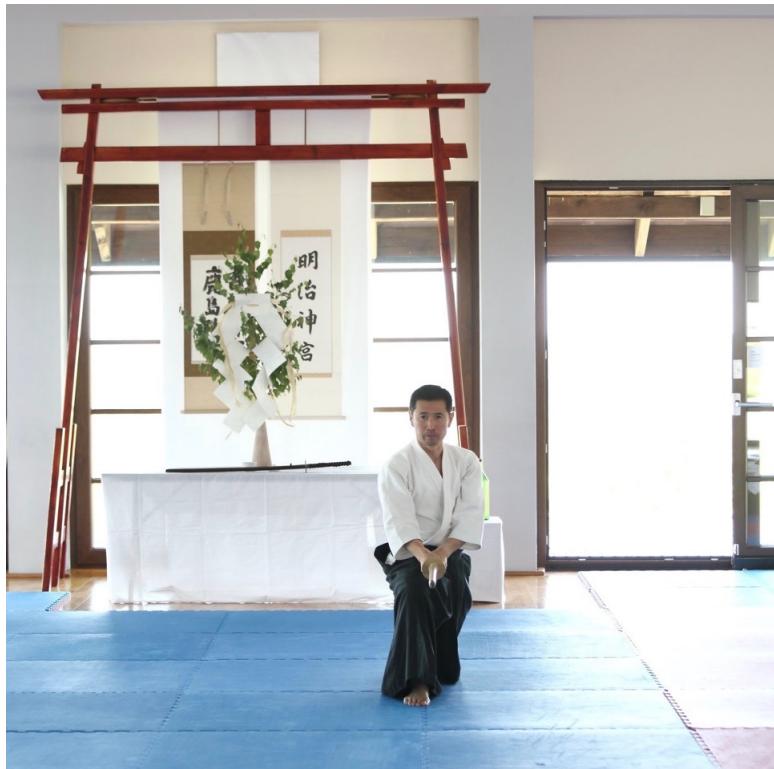
各大学クラブにおきまして、部員の獲得には毎年全力を尽くしておられることがあります。学生が求めるものが多様化している中、それを提供する側も守らなければならない部分がある反面、変えていくべき面にも目を向けていく必要があるのかも知れません。学生一人一人の生活に合わせたクラブの運営形態を取つていくことができるようにしていくことも大切です。

また、日本に住む外国人の数は、今年に入り日本の総人口に占める割合が初めて2%を超えたそうです。少子高齢化の波が寄せる我が国において、各クラブが海外留学生を受け入れやすくしていくことも必要です。

そしてそういったノウハウを持つ大学が本連盟内でそれ

宇田川哲哉先生

明治神宮武道場至誠館館長 宇田川 哲哉
全日本学生合気道連盟六十年周年にあたり



全日本学生合気道連盟設立六十周年誠におめでとうござります。衷心よりお祝い申し上げます。

初代亀井静香委員長から飯塚現委員長までの当連盟役員には、「学生による学生のための」連盟運営を六十年間に亘り継続してきたことに対し、心から敬意を表します。

私は、昨年十月十一日に明治神宮武道場至誠館四代目館長に就任したのを機に、久し振りに全日本学生合気道連盟の活動に接することとなりました。久し振りというのは、私も中央大学合気道部の部員として、学生時代はこの連盟に属していましたからです。

当時、学生をご指導いただいたのは、現在もご指導いただいている田中茂穂先生、成山哲郎先生そして鬼籍に入られた寺田精之先生、松尾忠敬先生がありました。全日本学生合気道演武大会や勝浦での合同研修会に参加した際に、今まで中大での合気道しか知らなかつた私は、先生方や他大学の先輩方の多種多才な技の数々に目を見張ったものです。また、先生方、先輩方には多くのことを教わりました。当連盟の特色は、様々な考え方、様々な稽古方法の大学が一緒に活動し

ているところです。今後も、この伝統を継承し、ひとつの考え方だけに捉われない運営を将来に亘り続けられることを期待いたします。

この度、指導者の一人として、私も約三十年ぶりに当連盟の諸君との縁をいただいたことは誠に感慨深いものがあります。

今年三月の勝浦での合同研修会に参加し、諸君と汗を流すことが出来たことは、私にとっても、とても有益な時間でありました。今後もできるだけ多くの行事に関わっていきたいと思っています。

さて、学生時代の四年間に、ひとつのこととに集中してやり遂げるということは、とても貴重な経験になります。四年間継続できればそれなりの自信が付くと思います。厳しい修練であるかもしれません、部員一同協心努力し、根気強く続けていただければと思います。

当連盟には、多くの先生、先輩が関係しており、立派なお手本が沢山あります。それは、何も合気道の技術に関することだけではありません。合気道その他の武道を通じて得られる精神性が重要であると思います。武道を通じて心身の鍛錬、誠実な人格の陶冶訓練を行い、以つて健全なる国民精神を一人ひとりが主体と成って作つていただきたいと思います。

明治維新の英雄西郷隆盛は、次のように遺しています。

「聖賢にならんと欲する志無く、古人の事跡を見、逆も企て及ばぬと云ふ様なる心ならば、戦に臨みて逃るより猶ほ卑怯なり。朱子も白刃を見て逃る者はどうもならぬと云はれたる。誠意を以て聖賢の書を読み、其の処分せられたる心を身に体し心に驗する修行政区さず、唯個様の言個様の事と云ふのみを知りたるとも、何の詮無きもの也。予今日人の論を聞くに、何程尤もに論ずるとも、处分に心行き渡らず、唯口舌の上のみならば、少しも感ずる心之れ無し。眞に其の処分有る人を見れば、實に感じ入る也。聖賢の書を空く読むのみならば、譬へば人の剣術を傍観するも同じにて、少しも自分に得心出来ず。自分に得心出来ずば、万一立ち合へと申されし時逃るより外有る間敷也。」

(南州翁遺訓 三十六)

これを現代語訳すると概ね次のようになります。

「聖人・賢人に自分もなろうという志もなく、過去の聖人・賢人の事跡を見て、とてもそのような者にはなれないなどといふ氣弱な心でいる事は戦いを前に逃げるよりも卑怯な態

度だ。朱子も剣の白刃を見て逃げるものはどうしようもないと言っている。誠の心をもつて聖人・賢人の本を読み、その行いの底にある心を、心と体で感じ取って、会得し行動できるように修行せずに、ただ、知識としてのみ知ったところで、何の役にも立たない。私は、今日人が話しているのを聞いて思うのだが、いかに尤もなことを言つても実践できるよう用心を動かさず、口先の議論であるならば、少しも心に響かない。実際に行動する人には感動するものだ。聖人・賢人の書をむなしく知識として読むことは、人が剣術をするのを傍観しているのと同じで、少しも身に付かない。身に付かなければ、万が一立ち合えと言われたら逃げるほかないだろう。」

諸君が高い志、気概をもつて修行に励まれ、社会で活躍される人材が多く輩出されることを期待しております。

当連盟の益々の発展と関係各位のご健勝、ご多幸を祈念して私の祝辞といたします。

令和元年八月記

三、
OB 寄稿

亀井 静香先輩

全日本学生合気道連盟六十周年

早いもので、本年全日本学生合気道連盟が六十周年を迎えると伺い、感慨を深くしています。連盟誌記念号の発刊に務める第六十期委員長及び幹事諸君の労をねぎらうと共にこれまで連盟を支えてこられた歴代委員長及び各位に心から感謝申しあげます。

気がつけば私も現在八十三歳になりますが、六十余年前に遡り東大に入学して駒場寮で生活していた時分を思い出します。当時は授業にも出ずて呑んだくれて暴れまわり、周りからひんしゅくをかう暴漢の輩でした。校内をうろついていた野犬を殺し、調理して「羊頭狗肉を売る」などと看板を掲げて寮祭で出店したところ、翌朝にあの権美智子ら女子学生に「デモを食った」と枕元で泣かれ、挙句に週刊誌などに大きく取り上げられたものだから、猛烈な批判を受けて当時アルバイトをしていた女の子の家庭教師も首になる始末でした。そんな荒れた学生生活が一変したのは、新宿の筑土八幡の養神館という合気道道場の門を叩いてからです。

そこで現在も明治神宮の至誠館で指導をしておられる田

中茂穂師範と出会い、生涯の知己を得ることになりました。その頃東大では合気道本部道場(植芝道場)の数土直方さん始め合気道同好者がおり、一緒に東大の正式運動部として合気道部を作ったのを皮切りに、中央、専修、本部道場系統の慶應大学など数校と学生合気道連盟を作る事にしました。私が初代委員長、副委員長は当時の慶應の合気道部主将で大平正芳総理の長男大平正樹君が務め、仲良くなり、頻繁に一緒に飲み歩いたものです。当然金のある大平君のおごりでしたが、彼は残念ながら病氣で若くして亡くなってしまいました。

自堕落な学生生活をしていた私が合気道に没頭したお陰で出会った今は亡き相棒の相原君、そして現在も親交を深める大川行光さん始め諸先輩方や友人と共に過ごした時間はその後の心の支えになり、人生の転機になつた事は間違いありません。東大卒業後サラリーマンになつていた私が一念發起して警察官僚を目指すと決意し、一年で辞した後に図書館を使用するために大学に戻り、学士入学して住み込み猛勉強に励んだ道場の七徳堂は特に思い出深い場所です。

安倍晋三現総理に外交問題で「中国や韓国などアジアの近隣諸国との付き合いは合気道の極意でいけよ」と進言をしたこともありました。相手と力任せに争うのでは無く、相手の力を制するにはタイミングと呼吸が肝心という事を伝えたかったのですが、私が難しい人間関係や、困難に出くわして

も乗り切りれたのは合気道の修練の賜物と感じています。

六十周年の節目を迎えて、合気道を通じて皆さんと繋がつて
いる事を喜びとし、更に連盟の活動が後身へと引き継がれて
いく事を切に願っております。

堀下直人先輩

一日一日

御代替わりのこのよき年、全日本学生合気道連盟が六〇周年を迎えたことにお祝いを申し上げます。これまで歴代の連盟委員各位、先生方、そしてもちろん学生諸氏の献身的なご尽力に、心より敬意を表します。

今年は生憎オリンピック前の改修工事のため日本武道館が使用できず、恒例の演武会の開催を見送らざるをえなかつたが、そのような中でも合同稽古を企画し、学生主導で連盟として充実した活動がきちんと行われることを示されたのは頼もしく、非常に素晴らしいことだと感じている。

当連盟が発足した昭和三〇年代半ばは、合気道もまだ知る人ぞ知るという新興の武道であった。それが現在、合気道の名はすっかり定着し、一般の人々の間にも一定のイメージが形作られるとともに、ともすればすでに完成し成長の余地の少ない武道と思われるまでになっている。しかし植芝盛平を開祖として数々の優れた弟子に継承された合気道はそれほ

ど懐の小さいものではない。一人の偉大な天才の心技体全てをそのまま受け継ぐことはそもそも不可能であるし、時期によって師のパフォーマンスや理合が変化していくのは当然なので、弟子としてはいつ師事し、どこに着目し、発展させていくかでその後進む道が異なってくることになる。現在の合気道の画一的なイメージは強烈な訴求力を持つていてのの、そこには価値が存在することも事実であり、それらを最初から捨象するのとしないのとでは武道を志す者としてのスタートラインが違う。教科書的な決まりの運動は学習者に安心感をもたらすが、そのように安心できる前提などないところが本来の戦いの場であろう。当連盟の強みのひとつは加盟校のスタイルの多様さにあり、各校が切磋琢磨することにより、合気道にもまだまだ多くの可能性と魅力とが隠されていることを示すことができると考えている。各大学、各部員は敬意を以て自己の流派以外の方法論に接することにより自分の打ち込んでいるものの特長を理解し、その上で思いと誇りをもって日々の稽古に邁進し、歴史の一員としてそれぞれの水準を上げていくことが重要であろう。

わたしが合気道に触れてから30年経つわけだが、未だに教えられること、今さら気づくことばかりで前途の長大さに気が遠くなる。それでも何とか前向きに稽古を続け、ましてや厚顔を承知で指導めいたことまでやっているのは学生の

頃、先生方、先輩方に人格と人格が触れ合うような稽古をつけていただき、道場三昧の生活を送った経験があればこそだと心底思う。講義に出席する必要なく、未成年でも飲酒できただ時と今では時代が全く異なるが、稽古を通じて伝わってくる学生諸君の純粋な情熱は今も変わらず、自分自身の刺激となっている。

当連盟は多数の指導者に恵まれているが、主役はあくまでも学生諸君である。これまでの慣行にとらわれず、創設時以来の「学生の、学生による、学生のための合気道連盟」という趣旨に則り、今後も学生の皆さんに納得し、自分たちにとって必要なしは有用な活動を主体的に追い求め、次の発展につなげていってほしい。そのベースにあるのが一日一日の充実した稽古であることは言うまでもない。

四、 加盟校紹介

大阪商業大学合気道部



主将作文

私は大学の合気道部の主将ですが私自身が無能であるため主将らしいことはできておりません。私が考えている理想はとにかく部員達を引っ張ることです。私は乱取りや演舞などで成績を残したことはありませんし、私が部員達に主将として認められるほどの力もありません。

しかし私は合気道部の主将となつた以上私は後輩である部員達に私が出来ることをできるだけやり部員に教えることをできるだけ教えることで私は合気道部を引っ張っていきたいと考えております。合気道の上手い下手は二の次と考えております。そのため合気道部としては弱体化していくがせめて部として成り立つように努力していくつもりです。

私はリーダーシップやカリスマ性などがあり子供の時から合気道をやっていれば少しあはいい主将になれたかも知れませんが後悔しても仕方ありませんので私のやり方で引っ張つていきます

部紹介

- 一、部の正式名称 大阪商業大学合氣道部
- 二、創部年 創部20年
- 三、流派 昭道館合氣道
- 四、部役員 師範 成山哲郎師範
顧問 田崎 公司 先生
- 五、部員数 監督 成山 哲也 先生
男子10名 女子1名
- 六、稽古時間
- 七、道場 每週月～金曜日 12：10～12：50
大阪商業大学柔道場
- 八、年間行事
- 6月9日 第39回関西学生合氣道競技大会
- 10月27日 第50回全日本学生合氣道競技大会
- 12月8日 第39回関西学生合氣道新人競技大会

金沢大学合気道部

主将作文

金沢大学合気道部主将 佐藤飛翔



金大合氣道部の佐藤飛翔です。この度は貴連盟の発足六十周年という記念の連盟誌に寄稿する機会をいただきうれしく存じます。貴連盟とは十月ごろに開かれる演武会と二月ごろに勝浦で行われる合宿でお世話になっています。僕たちは関東にはあまり行くことがないのでそこでしか交流が出来ない大学さんも多く、さらに自分の流派以外の演武を見たり、稽古をつけていただくことが出来るため毎年楽しみにしています。今年度もよろしくお願ひします。

合氣道部に入つて三年目に入りました。ここでいきなりのカミングアウトになりますが、ここまで部活を続けるとは思いませんでした。僕は相手に合わせることは苦手ですしつのことに集中すると他のことまで頭が回りません。まして自分が思った通り身体を動かすことはできません。実際に先輩にたくさん技を教えていただきましたが一発で出来たためしがありません。そのことを入部前から知っていたので「やつてはみたいけどそこまで続かないだろうな」と思い部活に入部しました。あれから二年。今では主将にまでなつてしま

いました。二年前の自分に教えたらビックリすること間違いなしです。これも全く身体を動かせていない僕に根気強く教えて下さった先輩方のおかげです。ありがとうございました。
ぼくは自分が全くできなかつたため多少はできない人の気持ちが分かると思っています。そのため、もしできなくて困っている子がいたらできない理由を一つ一つぶして、先輩たちのように根気強く付き合っていきたいなと思います。

部紹介

1. 部の正式名称	金沢大学体育会合氣道部
2. 創部年	昭和49年
3. 流派	鹿島神流
4. 部役員	名譽師範..田中茂穂 武学師範..田尾憲男 師範..村角美登 監督..坂井健一
5. 部員数	男子15名、女子7名、総数22名
6. 稽古時間	月曜 19..00~20..30 水曜 19..00~20..30

7. 道場	金沢大学第5体育館
8. 年間行事	
5月	新歓合宿
6月	北陸地区学生合氣道演武大会
7月	富山大学合同稽古
8月	夏合宿
10月	東京遠征
11月	創部45周年記念演武大会
12月	金大祭演武会
1月	富山大学合同稽古
2月	福井大学合同稽古
3月	1月 納会 2月 寒稽古 春合宿 連盟合宿

木曜 18..00~20..00
土曜 13..00~15..30

関西福祉科学大学合気道部



主将作文

「主将の役割」

関西福祉科学大学合気道部主将 城田拓夢

4月に主将となつてから日は短いが、師範や先生方、部員というように多くの人の支えがあつてこそ、現在の関西福祉科学大学合気道部があるよう思います。特に私が怪我により、稽古に参加出来ていない時にその事を強く感じました。それは、部員内で協力をを行い後輩たちを指導する、行事等の参加も部員内で協力するといった事や、定期的に先生方に御指導を頂いたことなど、私がいない状態であつても、多くの人の支えから、現在のように活気ある合気道部へと導いて頂いたため、多くの人の支えに応えられるように、主将としての役割を果たしていきたいと思います。私が考える主将の役割とは、部員や道場の方々との連絡などは勿論ですが、部員とのコミュニケーションを図り、部員のやる気を出させる、継続させる事であると考えています。今年度は部員の数も例年より増加したため、部員のやる気を継続させるということは重要な課題になると

思います。やる気が失つてしまふと充実した稽古に繋がらず、また、多くの人の支えにも応えることにも繋がらないため、主将としての役割を務め、部員のやる気を出させるということに力を注ぎ、今後も関西福祉科学大学合氣道部を活気ある部として継続させていきたいと考えております。

土 9：00～11：30

七、道場

関西福祉科学大学学園総合体育館 Do夢 2階武道場

八、年間行事

4月 新入生歓迎会

6月 関西大会

9月 夏季合宿

11月 全日本大会 社会人大会
12月 新人戦大会 忘年会

1月 寒稽古

3月 春季合宿

部紹介

- | | |
|----------|--|
| 一、部の正式名称 | 関西福祉科学大学合氣道部 |
| 二、創部年 | 1999年 12月 |
| 三、流派 | 昭道館合氣道 |
| 四、部役員 | 師範 成山哲郎師範
顧問兼部長 松村歌子先生
監督 瀧井大輔先輩 |
| 五、部員数 | 総数 12人（男子7人、女子5人） |
| 六、稽古時間 | 曜日：火、水、木、土
時間：火、水、木 18：30～20：30 |

京都産業大学体育会合氣道部

主将作文

京都産業大学体育会合氣道部 主将 番所弘行

私が大学生になり合氣道を始めてからもう三年が過ぎました。

私が合氣道に出会ったのは、大学一年生の時の合氣道講習会です。その際に京都産業合氣道部の師範であらせられる松尾正純先生に二か条をかけて頂いた事が合氣道を始めるきっかけになりました。当時の私は、高校生の時に柔道に励んでいた為、体が大きくて力が強い人が強いんだと思っていました。で手首を捻られただけで自分の体が制圧された事に驚いたのが懐かしく感じます。

合氣道部に入部して三年間が過ぎ、三年間を思い返すと強く思う事があります。それは、多くの友達と良い先輩に出会えた事です。合氣道を通して同じ大学の部員だけでなく、他大学の方々とも合同練習等を経て友達になる事が出来ました。又、合同練習での他流派の技を体験させて頂いたり出来るのはとても貴重な経験をさせて頂いているなど毎度思います。次に良き先輩に出会えた事です。同じ大学の先輩方だけでなく他大学の先輩方とも出会い、色々な事を教えて頂けたり、様々な経験をさせて頂けたりする事が出来たからです。



大学に入学し合気道部として活動している三年間は人生の中で最も楽しくて充実した経験をさせて頂けています。

残りの引退までの一年間も精一杯活動していきたいと思います。

部紹介

1、正式名称	京都産業大学体育会合氣道部	水	15：00～16：00
2、創部	1965年	木	17：00～18：30
3、流派	養神館合氣道	火	13：00～16：00
4、部役員	師範 松尾 正純先生	7、道場	京都産業体育館総合体育館練習室2
部長	菅原 宏太先生	8、年間行事	4月 新入生の為の合氣道講習会
師範代	宇都宮 正敏先生	5月 海外支部合同稽古	
コーチ	橋 龍成先輩	6、大学合同練習	
5、部員数	19名（男子11名女子8名）	6月 新入生歓迎の宴	
6、稽古時間	正規練習 月金 17：00～19：00	7月 前期打ち上げ練習	
	水 13：00～15：00	9月 夏季合宿	
自主練習	月金 19：00～20：00	10月 全日本学生合氣道総合演武大会	
		11月 養神館合氣道総合演武大会	
		学園祭	
		新幹部襲名披露の宴	
		後期打ち上げ練習	
		1月 幹部送別の宴	
		2月 春季合宿	
		3月 卒業式	

近畿大学体育会合気道部

主将作文

主将になつてわかつたこと

主将 石松 智貴

今回、主将作文ということで、私自身が主将になつてわかつたことを書いていきたいと思う。

私は結果がすべてという言葉が嫌いだ。

結果がすべてという言葉を使う人や考え方を持つている人は悲しい、ひねくれた考え方しかできない人ではないのかと考えてしまう。やはり、過程を見ないとその人がどれだけ練習してきたか、努力してきたのかわからない。

私が二回生のころ、四回生最後の関西大会での出来事。惜しくも近畿大学は男子団体戦三位、女子団体戦二位という結果だった。男女ともに優勝を目指していたので良い結果とはいえないかった。大会が終わり、ミーティングの時に当時の主将が言った言葉が衝撃で今でも覚えている。それは「結果がすべて」という言葉だ。正直何を言っているんだとおもった。結果は過程の元で成り立っているわけで、過程なくして結果はないというのが私の考えだった。そのときから、私は結果がすべてという言葉が嫌いになつた。三回生になつてもその



考えは変わらなかつた。

しかし、今年の六月、自分が四回生になつて最後の関西大会が終わつた。結果は男子団体戦四位、女子団体戦三位といふ散々な成績だつた。このとき来られていた、OB、OG、コーチに「近大も弱なつたもんやな」「他の大学と比べて、気持ちで負けてるわ」と再三言われた。私はそのときすごく悔しかつた。自分達が競技をしている上で、気持ちで勝ちたいと思ってないやつがどこにおんねんと言ひ返したかつた。しかし、少し落ち着いて考えてみると、私たちの練習風景や練習内容を知らない人達からみたらその結果がすべてなのだと思つた。男子団体戦が四位、女子団体戦が三位その結果だけしか届かない。その結果しか見て判断しない、それは当然のことだ。そのとき私は自分が二回生の時の主将の言葉を思い出した。これが、結果がすべてという意味なのかと。私は何も言い返すことのできない焦燥感に駆られた。

部紹介	
一、部の正式名称	近畿大学体育会合氣道部
二、創部年	一九六一年（昭和三六年）
三、流派	照道館
四、部役員	師範 成山哲郎 顧問 井筒敏昭 佐々木敏文 監督 伊藤博樹
五、部員数	総数二六名（男子十八名・女子八名）
六、稽古時間	月・水・金 一六・四〇・一八・三〇 火・木 一六・三〇・二一・〇〇
七、道場	近畿大学クラブセンター三階 合氣道場
八、年間行事	
五月	新入生歓迎会
六月	関西学生合氣道競技大会

きたが、最後の大会に向けて部員全員で挑んでいきたい。

そして結果につながるように努力をし、努力が報われるような結果を残したい。

東日本学生合氣道競技大会

八月

夏合宿

九月

東日本学生合氣道新人競技大会

十〇月

全日本学生合氣道競技大会

十一月

関西合氣道競技大会

関西学生合氣道新人競技大会

幹部交代式

三月

春合宿

卒業生送別会

國士館大學合氣道部

主将作文

最後の全日本に向けて

國士館大學 四年 万代 尚輝



私は現在、國士館大學合氣道部にて主将を勤めさせていただいている。私が入部した頃は十五名程の部員数であったが、現在の部員数は二十八名と規模がだいぶ大きくなつた。

また、部員数の増加に伴い稽古にも活気が出てくると大会でも入賞することが多くなり、昨年の全日本学生合氣道競技大会では十一年ぶりに乱取競技男子団体戦で優勝することができた。

そして、全日本大会が終わり先輩方は引退され、私が主将として部を引っ張ってきたが、時には自分のことを犠牲にしつつも部に尽くさなければいけないこともあり、歴代の先輩方の苦労が今身に染みている。

しかし、主将として過ごしたこの期間は私に多くのことを学ばせてくれた。

最後の全日本まで残りわずかな時間ではあるが、中々部員の気持ちをひとつにまとめることが上手くいっていない

のが現状だ。私に求められている役割としては全日本に向

けてこの現状を変えるべく、日々の稽古から誰よりも練習し、先頭に立つて皆を引っ張り全員の指揮を高めていくことだろう。

私たち四年生は今年度の十月に開催される全日本大会をもって引退となる。私たちの引退まで残りわずかとなり、次は後輩たちが合気道部を引っ張っていくことになる。私も最初は主将として部を引っ張つていけるか不安であり悩みも尽きなかった。しかし、この国士館大学合気道部に入部し、最後の一年間主将として部を引っ張ってきたことに一度も後悔はない。これも合気道を一から教えてくださった先生方やコーチをはじめ、偉大な先輩方、私を支えてくれた同期、後輩のおかげである。

私を支えてくれた方への感謝の気持ちを持つてしつかり恩返しができるように、乱取競技男子団体戦優勝を目指し全力で頑張っていく。

部紹介

一、 部の正式名称	国士館大学合気道部
二、 創部年	昭和38年
三、 流派	昭道館
四、 部役員	師範 成山哲郎 部長 河野寛
五、 部員数	28名(男子21名、女子7名)
六、 稽古時間	月、水、木、金、土 18:00~21時
七、 道場	国士館大学世田谷キャンパス メイプルセンチュリーホール2F柔道場、町田キャンパス 第二柔道場
八、 年間行事	夏季合宿、寒稽古、春季合宿など

上智大学体育会合気道部

主将作文



押忍。上智大学体育会合気道部第58代主将を務めております竹田秀平です。上智大学には合気道系の団体が二つ存在します。ひとつが合気会に所属している合気会、そしてもうひとつが養神館の流れを汲む鍊身会に所属する私たち合気道部です。普段の練習では、長年にわたり養神館において塩田剛三先生のもとで合気道の修練に励み合気道の研究に多大な功績を収められた養神館合気道八段の千田務師範のもとで月2回ほど指導を受けているほか、合気道部OBOGの幅広い年齢層の方々と練習する機会も多いです。

上智大学合気道部の特徴として、男女比率が毎年同じくらいであるということが挙げられます。近年は女子比率が男子を上回ることもあり、強く華麗な演武を持ち味としております。また稽古やOBOG会等でOBOGの先輩方に接する機会の多さや部員同士の仲の良さから、部全体でひとつの家族のような和やかさを感じられる場を成しております。そこもこの部の魅力のひとつであります。

まだまだ自分自身部の幹部として未熟ではありますが、後輩達により一層合気道の楽しさを伝えられるように、また

それを通して合気道の魅力をもっと多くの人に知つてもら
えるように精進して参りたいと思います。

部紹介

一、部の正式名称	上智大学体育会合氣道部
二、創部年	1969年
三、流派	鍊身会
四、部役員	最高師範 千田 務 主将 竹田 秀平
五、部員数総数	16名・男子8名・女子9名
六、稽古時間	月・水・金 17..30(20..00) 土 14..00(17..00)
七、道場	上智大学体育館地下柔道場
八、年間行事	新歓演武 有段級審査 幹部交代 上南戦(上智南山総合体育競技大会) 演武 夏合宿 練身会大会 昇段級審査 春合宿
4月	新歓演武
6月	有段級審査
7月	幹部交代
8月	上南戦(上智南山総合体育競技大会) 演武 夏合宿
12月	練身会大会 昇段級審査
2月	春合宿

成城大学合気道部

主将作文

第五十六代主将 吉田 圭汰



合氣道って楽しいな？高校までずっと野球しかやってこなかつたが、小さい頃からもつといろいろな武道に触れていたかったなと思う。自分は身長が高くて力もそこそこ強いのに、自分よりも小さい人に技を食らったり負けたりする。すんげえ。それに、合氣道をきっかけに他の様々な武道や格闘技にも興味を持つことができたし、もつといろいろなことをやってみたい。最強になりたい。

「強くなりてえ」そんな興味本位で合氣道部に入部した。

理由は大学のパンフレットに全国三位って書いてあったから。四年生になった今、「強くなれたのか」と聞かれて、「なれた」と自信を持って言える自信はないが、大学で合

氣道部に入つてよかつたとは本気で思っている。

というか、もう四年生なのか。まさかこんなに早く最上級生となるなんて思つてもいなかつた。しかも主将だなんて。向いてないと今でも思つている。

自分は逃げてばかりの弱い人間だ。昔から嫌われることが嫌だつた。だから誰にでも優しく接していた。好かれる

ようなことは絶対にしないけれど嫌われるようなことも絶対にしなかった。主将になつたからといって嫌われるというわけでもないけれども、主将としてチームをまとめ、引っ張るためには優しさだけではやつていけない。現状、主将としてチームをまとめきれていないのも事実であり、力の無さを痛感する。

今になつて、自分は恵まれていたなと思う。入部した当初の合気道部は強かつた。知識も技術もとにかくすごかつた。少なくとも今の自分の作り上げたチームよりは。後輩たちにもそんな環境でやらせてあげたかった。自分たちには力不足だったが。そこにに関しては申し訳ない。もっと先輩方から学んでおけばよかったですと後悔している。四年生としてあまり時間が残されていないが、後輩たちのポテンシヤルはまだまだこんなもんじゃない。個人でも団体でも演武でも普通に全日本で優勝を争えるチームになれると思つてゐる。だからこそ自分が教えられることは教え尽くしたい。

あと、後輩たちみんなには合気道の楽しさをもっと感じて欲しい。何のための基本なのか。どうやつたら技で相手は倒れるのか。そんなことを少し考えるだけで、合気道は楽しく

なる。楽しくなれば強くなれる。強くなればもっと楽しくなる。まあでもまずは、強いとか弱いとか、上手いとか下手とか、力の強さとか体の大きさなんて関係ない。せっかく演武と乱取がある。好きな方をやればいい。練習したい、強くなりたい、上手くなりたい、試合で早く試したい。そんな気持ちを自分の中で発見できるようになれば、もっと合気道が楽しくなるし成長できるんじやないかな。部活が楽しくなれば大学生活ももっと充実すると思う。それで最後引退するときに合気道部に入つてよかった楽しかったって思えてくれてたらしいな

部紹介

一、部の正式名称 成城大学合気道部

二、創部年 昭和四一年

三、流派 富木流合気道

四、部役員

師範 成山 哲郎

師範 酒井 進之介

部長 中村 國則

監督 小松 正治

五、部員數	十六名（男子九名、女子七名）
六、稽古時間	火・水・木 16.. 30\18.. 30
七、道場	土 13.. 00\15.. 30
八、年間行事	日 10.. 00\12.. 30
	成城大学大道場・成城大学第二道場
4月	新歓
6月	関西大会・春季関東大会
9月	昇級昇段審査
10月	前期納会
12月	夏合宿
1月	全国大会
2月	東日本大会・関西新人
3月	昇級昇段審査・後期納会
	昇級昇段審査
	春合宿

専修大学体育会合氣道部



主将作文

合氣道部に入つて

岡村初穂

専修大学体育会合氣道部に入部してからあつといいう間に時が過ぎた。一年次の雑用係から始まつたと思えば早くも指導する側となつてしまつた。

私は中学校から部活にて合氣道を始め、その後も高校で続けてきた。当時は特に厳しいこともなく、楽しく日々の稽古に励んだ。中学である程度の形は出来ていたので、高校に入りたての頃であつても同期に教えることも少なくなかった。新たな技に触れる時間が増えていき、教えつつ学びつつ過ごす中、人との関わりは大切だと感じた。部活動紹介・文化祭と、人前で演武する機会が設けられる際は、部員全員の協力が必要となり、ステージの上でどのように動けば見栄えが良くなるかを考えたものである。

高校時代は、始めはよく分からずに行つっていた、礼に始まり礼に終わるという、また常に敬意を払うという感覚が次第に分かつてきた時である。現在と同じく先輩・後輩の立場関係があり、先輩から叱られることもあった。その都度の反省で

次に活かしていくことで部をより良いものとしてこられたのだと思う。

部紹介

中学・高校、更に大学と、ここまで合気道を続けることができたのは、これまで同じ部に所属し同じ苦労を共にした仲間の支えがあったからである。相手の立場を考え、サポートしあえる仲間がいたからこそ自分の中のモチベーションを保つことができたのだと思う。これは現在でも続いており、心身を鍛えることにも繋がっている。そして日々楽しい時間を過ごすことができた。辛いことが多かったが、この経験ができたのは、同じ大学にいる中の同じ意志を持つ仲間と巡り会えたからだと思う。一生懸命取り組むことで技と共に心を磨いていく、精一杯の努力ができた。一人ひとりの個性を見ながら、一緒にいることで連帯感が生まれ、團結力・協調性というものを学ぶことができた。そのおかげで自分に自信をつけられたのだと思う。今後も日々の努力を怠らず、合気道を続けたい。

一、部の正式名称 専修大学体育会合氣道部
二、創部年 昭和三二年
三、流派 体術・合氣会系

剣術・鹿島の太刀

四、部役員
最高師範 田中茂穂
師範 堀越祐嗣
部長 永江雅和
監督 佐藤幸輝
助監督 小谷田洋一

五、部員数
三三人 男二四 女九
六、稽古時間
月、火、木、金 一〇..四五(一二..四五
水 一二..三〇(一四..三〇
土 一四..〇〇(一六..〇〇
火、木(至誠館) 一五..一〇(一七..一〇

七、道場

専修大学生田キャンパス総合体育館柔道場

八、年間行事

四月	新入生勧誘
五月	新入生歓迎会
六月	新歓合宿、有段・昇段審査
七月	三大学合同稽古
八月	ワンドーチームメイト
九月	夏合宿
十月	武道館演武、幹部交代式
一一月	鳳祭演武、有段・昇級審査
一二月	納会
一月	寒稽古
二月	春合宿
三月	連盟合宿、二十大学合同稽古、歓送会

拓殖大学麗澤会体育局合氣道部



主将作文

主将 鈴木尚文

この度、全日本学生合氣道連盟発足六十周年、誠におめでとうございます。今回、六十周年記念号に主将として寄稿させて頂く事となり、感謝申し上げます。

さらに今年、我が拓殖大学合氣道部も創部六十周年を迎える事となりました。連盟と共に、同じく六十周年を迎えられた事も、感慨深いものがあります。これも連盟の皆様のご支援、ご指導のおかげと厚く御礼申し上げます。また、この記念すべき六十周年に主将を務めさせて頂く事を光栄に思います。

今後とも益々のご指導ご鞭撻の程、宜しくお願ひ致します。

拓大合氣道部は昭和三十四年に同好会として発足し、翌三十五年、拓殖大学麗澤会体育局合氣道部として承認されました。塩田剛三・養神館々長をO.Bとして初代師範に迎え、寺田精之監督、松尾忠敬コーチの元で錚々たる先輩方を輩出して参りました。現在、部員計十三名とごく少人数

で活動しておりますが、先輩方から受け継いできた拓大の合氣道は今でも息づいております。六十周年を機に、改め

て部員一人一人が、誇りある拓大合氣道部の一員としての自覚を持ち、日々の稽古へ臨む姿勢を新たにしたいと思います。

さて、僭越ながら私事について述べさせて頂きますと、

今年で私が合氣道部へ入部して早くも三年目に入りました。部員として過ごすのも残り数ヶ月・・・と言いたい所ですが、私はまだ学三（三年生）、つまりもう一年あり、来年も主将として活動する事となります。これにつきましては、元々から上の学年が居ないため仕様のない事です。

先生方や周りからは「二年間も務めるのは大変だ」と言われるのですが、むしろ私としては通常より一年多く主将としてこの部に携わるというのは嬉しい事で、この部を再興するために、様々な事にチャレンジしたいと思つております。その中で特に、他会派合同のこの連盟の繋がりを生かし、他大学との合同稽古などの交流を多くして参るつもりです。

最後になりますが、全日本学生合氣道連盟の益々のご隆盛とご繁栄を祈念申し上げます。

部紹介

一、部の正式名称 拓殖大学麗澤会体育局合氣道部
二、創部年 1959（昭和34）年

三、流派 養神館

四、部役員 部長 辻善行
名譽師範 須藤百治

師範 吉岡卓也
コーチ師範 芝田裕二

監督 魚津昌弘
コーチ 山下貴晴

五、部員数 13名 男子10名 女子3名

六、稽古時間 月・水・木・金 17..00

{ 19..00

土 10..30

{ 12..30

拓殖大学八王子国際キャンパス

第一体育館武道場

八、年間行事

- | | |
|-----|--------------------|
| 4月 | 新歓ロード |
| 5月 | 浦安市合気道演武大会 |
| 6月 | 新入生歓迎会、昇段昇級審査 |
| 8月 | 寺田藩士のお墓参り |
| 9月 | 夏季合宿 |
| 10月 | 全日本養神館合気道総合演武大会 |
| | 全日本学生合気道演武大会、紅陵祭演武 |
| 11月 | 研修演武会、昇段昇級審査、幹部交代 |
| 12月 | 納会 |
| 1月 | 監督宅へ新年の挨拶、新年会 |
| 2月 | 春季合宿 |
| 3月 | 学生合気道合同研修会（勝浦合宿） |

中央大学学友会体育連盟合気道部



主将作文

仲間への感謝

Chou univ 主将 Norifumi Hosoya

「合気道楽しい？」と聞かれたら「うーん、わかんない」と答え、「合気道好き？」と聞かれても「うーん」とあります。嫌いではありませんが、簡単に「好き」とは答えられません。ちなみに、入部当時の私は迷いなく「楽しいです！」と答えていました。ただ、やればやるほど壁にぶつかり、楽しい気持ちだけでなく暗い気持ちも感じる機会が増えています。そんな私の合気道部生活について、当時の出来事を振り返りながら現在の思いを書きたいと思います。

他大について。二年生の夏以降、「つまらない」と感じ、悩み苦しんだ時期がありました。気分の沈んだ状態で、しぶしぶ金沢で行わられた五大学合同稽古に参加し、そこで他大のメンバーに出会いました。その時は、その場限りの繋がりになると考えていましたが、意外にも関係は続き、一人また一人と他大学に仲間ができました。「仲間」といっても、ただの仲良しとは違って、負けたくない相手でもあり、切磋琢磨で

きるメンバーでもありました。他大学をはじめ、一緒に取り組むメンバーを「仲間」と思えてから、稽古に打ち込むことが苦ではなくなりました。「つまらない」という思いも、気がつけば感じなくなっていたと思います。「心細い」「面倒だ」と思っていた他大学との合同稽古も、最終的には好きになっていました。これまで私を受け入れてくれた方々には本当に感謝しています。引退後もまた会えたら嬉しいです。

大学について。主将になつた当初は、责任感から「自分さえ頑張れば」という気持ちを、少なからず持っていました。ただ、やはり自分のできることには限界があり、周りの支えを感じる場面が多々ありました。「大学四年生にもなつて、そんな当たり前のこと気にがつかなかつたのか!」と思われるかもしれません、恥ずかしながら時間がかかりました。思えば、私は、パソコン苦手、金銭感覚皆無、口下手、周りに無頓着。その欠点を補つてくれる優秀な仲間がいたこと、主将として立ててくれる先輩後輩がいたこと、本当に恵まれていたと感じています。心から感謝しています。

私は、「できない自分が嫌だ」という思いから、これまで続けてきました。楽しいかは正直よくわかりません。それでも、「やつてよかつた」とだけは胸を張つて言えます。生涯

の「仲間」と出会うことができたからです。これまで支えてくださった皆様、本当にありがとうございました。今後も中央大学をよろしくお願ひします。

部紹介

一、部の正式名称

中央大学学友会体育連盟合氣道部

二、創部年

1958年

三、流派

合氣会

四、部役員

師範 田中茂穂
部長 二澤英治

五、部員数

監督 副島武

36名（男子18名、女子18名）

六、稽古時間

月	13..00..14..30
火	8..30..10..30
水	19..00..20..30
木	13..00..14..30
金	16..30..18..00
土	17..00..19..00

七、道場

中央大学

多摩キャンパス 第一体育館

合氣道場

八、年間行事

4月	新勧期間
5月	新歓合宿
6月	前期昇段審査
	三大学合同稽古
	O B 総会
9月	夏合宿
10月	武道館演武
11月	後期昇段審査
12月	幹部交代
2月	春合宿
3月	連盟合宿

帝京大学理工学部合気道部



主将作文

合氣道がくれたもの

帝京大学合氣道部 二年 和氣 啓志

私が合氣道部に入部しようとしたきっかけは、格好良さそ
うだったからだ。幼い頃から器械体操しか触れておらず、そ
のせいかスポーツは好きだったが球技やチームプレーは苦
手だった。部活動の勧誘をされた際に、合氣道なら体操のよ
うに体を動かすだけだし、チームプレーも必要ないと思い見
学に行つた。そのときに洗練された動きの美しさ、技のキレ
に一目惚れしてしまい入部を決めた。

合氣道部に入部したことで充実した大学生活を送ること
ができるようになつた。大学に入学当初は自分に自信がなく、
人と接することが苦手だった。入部してからも初めは、技の
動きは訳がわからなかつたし、受け身は体操の前転・後転に
なつてしまい頭をぶつけることもよくあつた。四方投げでき
え何が何だかわからず、先輩を混乱させてしまつたこともあ
る。しかし今では、技で力をかける場所や方向がよくわかる
ようになり、一つの技ができるようになると次の技また次の
技と興味が広がるようになつた。日々の稽古が楽しくなり、
熱中できる物を得られたことで自分に自信を持つことがで

きるようになった。

また、合気道部に入部したことにより多くの社会勉強ができた。大学に入った当初は同じ学科の同じ授業をとっている限られた友人しかいなかつたが、合気道部に入ったことで他学科の友人や先輩ができた。さらに OB の先輩方、師範の方々等幅広い年代の人と連絡を取り合つたり、稽古をしたり、部長として大学関係者とやりとりをしたりすることで接し方や礼儀を学ぶことができた。

合気道は私に様々なものを教えてくれた。これからも合気道から様々なことを学んでいきたいと思う。

部紹介

- 一、部の正式名称 帝京大学理工学部合気道部
- 二、創部年 平成2年
- 三、流派 本部道場
- 四、部役員
顧問.. 小川充洋
主将.. 和氣啓志
主務.. 小宅樹

五、部員数 12人（男7 女5）

六、稽古時間

月曜日 17:00~19:00

水曜日 17:00~19:00

金曜日 17:00~19:00

土曜日 14:00~16:00

七、道場

帝京大学体育館柔道場

八、年間行事

5月 新入生歓迎会

6月 昇段昇級審査

8月 夏合宿

10月 武道館演武大会

11月 学園祭

12月 昇段昇級審査

1月 忘年会

天理大学体育総部合気道部

主将作文

天理大学体育総部合気道部
第三十九代主将 滝澤太秀



私は小学4年の頃から地元の合気道の町道場に通っています。なので、今の私の合気道歴は約12年になります。社会人になつても合気道を続けて、一生合気道をする人生を歩みたいと思っています。私これから長い合気道人生の中でも、今の学生の合気道に身を置いていることはとても貴重な財産になると思います。なぜなら、たった4年間という短い期間ですが、とても濃厚で、貴重な経験を沢山することができます。そして今、一番様々なことを経験することができる主将を務めることができるなどをとても光栄に思っています。

私が主将を務めて一番養われた能力は「聴く力」です。なぜなら、私の同期にはスペイン、中国、タイからの留学生部員がおり、日本人と会話をする時以上に注意深く話を聴くことがとても大切であるからです。彼らは、天理大学体育総部合気道部創部以来初となる外国人留学生が部活動を4年間やり通し、卒部するという快挙を成し遂げようとしております。

その快挙に私も尽力しているのですが、やはり文化の違い、理解の相違、言葉の壁があり、留学生部員が同期にいる中で部をまとめていくことは難しく、日本人部員との衝突も幾度もありました。初めの方はお互いの思っていることをぶつけ合い、どちらかが折れるまで話し合いが続いたりしました。

ず、これから合気道人生を歩んでいきたいです。ありがとうございました。

部紹介

ですが、前主将の池田先輩や地元の町道場の社会人門下生に相談し、しつかり相手の話を聴き、言葉の裏の意味をくみ取る意識を得ました。すると、彼らが考えていることと日本入部員が考えていることが明確に分かるようになり、解決策を考えることが楽になりました。まだまだ力不足ですが、24名の現役部員の先頭に立つて部活動を盛り上げて活動したいと思っております。

また、我々第三十九代天理大学体育総部合氣道部は「感謝」を基本方針に掲げており、部員一人ひとりが合氣道に打ち込むことができる環境や、支えていただいている方々に対しの感謝の気持ちを忘れず、日々の部活動に取り組んでおります。これらの言葉は安居総監督や東原監督がよく説いてくださる陽気ぐらしの話をインスピアイし、現役部員全員で考えました。主将という立場になり、本当に多くの方々に支えられていることを実感しております。この感謝の気持ちを忘れ

一、部の正式名称 天理大学体育総部合氣道部

二、創部年 1980年

三、流派 昭道館合氣道連盟

四、部役員 師範..成山哲郎

部長..澤井治郎

監督..東原善一

五、部員数 24(男子..14 女子..10)

六、稽古時間 月・火・木・金

17..00~19..30

七、道場 天理高校第2柔道場

八、年間行事

4月 新入生歓迎会

6月 関西学生合氣道競技大会

新入部員歓迎会

7月 天理市民体育大会

8月 夏季強化合宿
11月 全日本学生合氣道競技大会
12月 関西学生合氣道新人競技大会
3月 春季強化合宿、小島杯

東京大学運動会合氣道部

主将作文

祝・六十周年

東京大学運動会合氣道部

主将 藤田 貴太郎



全日本合氣道連盟は、幾つかの流派の大学合氣道部によつて構成されている。異なる流派が共に演武をし、合宿を行う意味は何か。

そもそも、流派とはなぜあるのか。それは各流派を創られた先生方が自らの稽古によつて高みに達し、それを現在まで各流派で受け継いでいるからである。創流した者が各流派で個別にいる以上、各流派の差異は必然的に生まれる。しかし、忘れてはいけないのは「合氣道」をしているという共通項を認識することである。

日本語で「道（みち）」と言われた時に、我々はおそらく「一本の」道が続いている景色を思い浮かべる。複数の道を脳内に思い浮かべる人はあまりいない。このイメージからだろうか、古来より「道」という言葉に、「物事の根本」「共通性」「あるべき姿」といった意味を読み取る。中世以降に発

達した芸事は芸「道」となり、戦がなくなった江戸時代には武士の価値観が「武士道」となった。これらは共通して物質的なものを超えたところに真理を見出す。また、古来より続

いていた天「道」信仰は「あるべき姿」「必然的な成り行き」

が存在するという価値観を根本に成す。「道」をあるべき秩序として理解する異国の朱子学が、武士を頂点とする身分社会の維持に利用されたのも、日本人の考え方と親和的だったのだろう。以上の例から、「道」という言葉は、物事の中核、あ

るべき姿というものを暗黙のうちに意味するのである。「武道とは人格形成だ」という文言は、このような物事の根本を志向するべきだという考え方を、人格の側面からわかりやすく述べているのだと理解している。

このような「道」の持つ精神からすれば、我々は各流派の共通性に注目すべきなのだろう。違いに目が行くのは当たり前で、「他流派の違うところが学べて新鮮でした」という感想はよく聞くが、それでは外国人との異文化交流と同じでどこか、異様なものを見ている感じがする。武「道」、合気「道」をやっている以上、根本にある共通する体の動かし方があるはずで、それが何かを感じ取り、各大学に持ち帰り、中核に据えて稽古をすれば、連盟として集まる意味が出てくるし、

さらには連盟としての一体感も一層出るのではないかと考える。

終わりに

この度、全日本合気道連盟が六十周年を迎えたこと、心よりお祝い申し上げます。連盟の一層の発展のため、東大合気道部は今後とも尽力していく所存です。

部紹介

一、部の正式名称	東京大学運動会合氣道部
二、創部年	昭和29年（1954年）
三、流派	田中先生門下
四、部役員	永世師範 田中茂穂先生 名誉師範 稲葉 稔先生
五、部員数	師範 山田高廣先生 師範代 堀下直人先生 部長 能智正博先生
六、稽古時間	52名（男43女9） 平日 昼40分×5日間 夜2時間×2日間
七、道場	土曜 朝2時間 駒場キャンパス第一体育館柔道場 本郷キャンパス七徳堂 明治神宮至誠館
八、年間行事	合宿6回（六月、夏、秋、冬、二月、春） 演武4回（新歎、五月祭、駒場祭、連盟） 合同稽古6回程 など

東京医科大学合気道部



主将作文

創立六十周年誠におめでとうございます。

東京医科大学合気道部

主将 植野 大空斗

日本学生合気道連盟設立六十周年を部員・卒業生一同心からお慶び申しあげます。先日、我々の部活の創立者の先生に設立当時の事を伺う機会がございました。その先生によると、東京医科大学合気道部は昭和四十七年に設立され、初期は武田流合気道を行なつっていましたが、師範、コーチといった指導者不足で体系的な練習を行うことが困難でした。その一方で、日本合気道協会は早稲田大学を中心とした体系的な指導のもと、乱取試合、演舞競技が盛んに行なわれていました。そうした背景もあり、早稲田大学関係者に御協力頂き、我々の部も昭和四十九年から昭和五十年にかけて日本学生合気道連盟へと所属変更したとお聞きしております。そして、所属変更当時から現在まで、数多くの師範やコーチを日本合気道協会の方々から迎えております。東京医科大学合気道部が今まで活動が継続出来ているのも、日本学生合気道連盟関係者やそのOB、OGの方々のご支援の賜物と心より感謝申

し上げます。

現在東京医科大学合氣道部は、医学科看護学科双方合わせて十名前後が現役部員として所属しております。年々医学の進歩と共に、医学科、看護学科の両学科ともカリキュラムが厳しくなっており、練習を工夫しながら少ない時間でできる限り効率よく稽古ができるよう努力して活動しています。これからも日本学生合氣道連盟が七十周年、八十周年、百周年と続きます事をお祈りするとともに、東京医科大学合氣道部もその一助となれるよう尽力して参りますので、今後とも宜しくお願い申し上げます。

部紹介

一、部の正式名称 東京医科大学合氣道部
二、創部年 1972年

三、流派 富木流
四、部役員 部長：塚原 清彰
監督：成松 明知

五、部員数 13 (男子：6 女子：7)

六、稽古時間 火曜、木曜(17:30～19:30)
土曜日(10:30～12:30)

七、道場

東京医科大学 大学キャンパス 記念館地下道場

八、年間行事

3月	卒業式	4月	新入生勧誘
12月	納会	6月	新入生歓迎会
7月	幹部交代式	7月下旬	夏合宿

東洋英和女学院大学体育会合氣道部



主将作文

南野伽奈

私が合氣道部に入部してから3年目となりました。最初に入部したときは、元々空手をやっていたもの的一身上の都合により目標まで到達できなかつた自分自身へのリベンジという気持ちが強く、合氣道そのものへの気持ちを言うものはあまり無かつたかもしません。しかし、同期や先輩方、千津子先生や他団体の方々との関わりを通して、先輩方や先生に憧れる気持ちが強くなり、この3年間必死に稽古をしてまいりました。

私が主将となつたのは2年生の後期からでしたが、先輩方からお声がけをいただいたのは、1年生の冬でした。最初の時期は主将補佐という形で動いていたものの入部して1年も経つておらず、合氣道の技もままならない自分が2年生から部活を引っ張つていけるのだろうかと、お声がけをいただいた嬉しさの反面、不安も沢山ありました。その中で主将として合氣道部を引っ張つていこうという気持ちになれたのには、同期の存在があります。2・1期は当時全員役職の補佐についていて、それぞれの仕事に対して不安や様々な気持ちがあつたであろう中で、私の胸中の吐露を聞いてくれ、背中

を押してもらいました。また、それぞれが自分の役職をきつ

ちりとこなそうという心持や仕事ぶりから感化され、決断で

きたのを覚えて います。

しかし、同期の中でもそれぞれが任された仕事について、コミュニケーション不足が原因で行き詰つてしまつたことがありました。そのことをきっかけにコミュニケーション意識の低さを猛省し、部員達と向き合い、話し合い、積極的に声をかけることを大切にしています

現在部員は8人と、私が入部した頃と比べずいぶん人数が減つてしましました。4年生と1年生がいない現状は、正直人数不足で、新規の新入部員を獲得出来なかつたこと、申し訳なく思つております。一つ下の学年の2人には今後、合気道の技はもちろんのこと、仕事の引継ぎも検討していく時期が迫つてきています。今まで初段に向けて自分たちの鍛錬の方に集中せざるをえなかつたので、今後は後輩への指導により力を入れていくようにしていかなければなりません。

引退までの残り約1年間、今までの経験を糧にして、合気道部の伝統を守りつつ、今後も部活全体で一丸となつて、合気道を楽しみながら鍛錬できるような場にしていけるよう、主将として努めていきたいと思ひます。

部紹介

一、部の正式名称 東洋英和女学院大学体育会合氣道部

二、創部年 平成7年

三、流派 養神館

四、部役員

師範 松尾千津子
顧問 望月敏弘

主将 南野伽奈

五、部員数 8人

六、稽古時間 木・金曜日：17：20～19：20

自主練日 火曜日 17：20～19：20

七、道場 東洋英和女学院大学 クラブハウス内ナルド

八、年間行事

4月 勧誘活動、護身術講座

5月 浦安市合氣道演武大会

6月 新入生歓迎会

7月 昇級昇段審査

9月 夏合宿

10月 全日本合氣道演武大会

11月 かえで祭、全日本養神館合氣道総合演武大会

12月 升級・昇段審査、クリスマスパーティー

1月

新年会

3月 春合宿、卒業生送別会（追いコン）

富山大学体育会合気道部

主将作文

富山大学体育会合気道部
宇田 智也



合気道を始めて今年で三年目となつた。これまで多くの人と稽古をし、多くのことを学ぶことができた。その中には技に関するだけでなく、合気道そのものについての考え方もあり、合気道の奥の深さに驚かされた。また、教えてもらった学んだことの他に、どうすれば技がかかるのか仲間と時間をかけて考えたことで得られたものもある。どれも私にとっては大切な経験であり、これからもそれらを糧に成長していきたいと思っている。

これまで合気道を続けることができたのは、一緒に稽古をしてくれる仲間がいたからだと思ってる。仲間の大切さは小さい頃から何度も教えられてきた為、これ以上学ぶことはないと今まで思っていた。その上、仲間がいて当たり前だとすら思っていた。しかし、あることをきっかけに仲間の大切さについて改めて考え直すようになった。それは私の尊敬する先生との会話である。先生は何十年もの間、稽古の相手がないなくして一人で稽古をしていたそうである。誰にも教えても

らえず、技がかかるかどうかも分からぬ中、諦めず稽古に

励んでいたが、仲間がいればもっと早く上達できていたのではないかと話して下さった。今では私を含めた教え子との稽古を大切にしているとのことである。その話を聞いた時、私が成長することができたのは自分の努力のおかげだけではなく、仲間が一緒に稽古をしてくれたおかげでもあるのだと気づかされた。また、仲間が必要なのは自分だけでなく、仲間も同様であるということにも気づいた。

私は今年度、富山大学体育会合氣道部の主将となつた。私は部員達には仲間を大切にできるようになってほしいと思つてゐる。そのために主将としてできるることは惜しまずやつてゐる。それらは部員のためでもあり、私自身のためでもある。これから多くの困難が待ち受けていると思うが、どんなときでも仲間を大切に思う気持ちだけは忘れないようしたい。それは私だけでなく、部員たちもそうなれるように精一杯頑張つていきたい。

部紹介

一、部の正式名称	富山大学体育会合氣道部
二、創部年	1970年
三、流派	至誠館
四、部役員派	名譽師範 田中 茂穂 師範 長井 忍
五、部員	部長 小川 亮 指導補佐 坂東 隆、樺島 重憲 監督 堤 孝雄、山口 紘史 助監督 村田 敏昭 コーチ 徳道 孝治 吉田 華寿満
六、稽古時間	火曜日、金曜日：18時30分～20時30分 水曜日：14時～16時 土曜日：15時～17時

七、道 場

富山大学五福キャンパス武道場

八、年 間 行 事

4月	学館前演舞、バーベキュー
5月	新歓コンパ
6月	北国大会
7月	金大合同稽古(富山主催)
7月	名古屋至誠館合宿
8月	夏合宿
9月	東京演舞
10月	金大合同稽古(金大主催)
11月	納会、忘年会
12月	寒稽古
1月	1、2年強化練習、追い出しコンペ
2月	春合宿、幹部交代式
3月	

明治学院大学体育会合氣道部

主将作文



明治学院大学体育会合氣道部第6・1代主将を務めさせていただいている宇和川亮と申します。我が部は鍊身会に所属し、千田務最高師範の下で、男子14名、女子14名の計28名で活動しております。加盟部紹介の主将作文ということです、1年間主将を務めて考えてきた、「主将とは何か」についてお話をさせていただきたいと思います。

「主将とは、合氣道と合氣道部に関わるあらゆる事柄について肯定的に受け入れる役職」である。これが私が1年間主将を務めて導いた結論であります。

まず、当たり前ではありますが、部員の代表として、合氣道が好きであることは当然です。そして参加できる稽古には最大限参加し、幅広い合氣道の知識や技術を習得することが主将には求められます。それは決して主将自身が合氣道に長けるためではなく、部の指導の要として、後輩に自分の成長や試練を乗り切った達成感のようなものを経験させてあげるためです。

また、合氣道部には演武会、合宿、大会、学園祭、審査、卒業式などの様々な行事があります。中には面倒なことや辛

い」ともあると思います。ですが、そういった負のイメージ

を部員を統括する主将がもつているとどうでしょうか。恐らく他の部員にとつても行事は面倒なものでしかなくなり、意義を見出せなくなると思います。これが「合気道部に関わるあらゆる事柄について肯定的に受け入れる」ことの重要さとなります。

私は主将には、力ずくで部員を動かすのでもなく、独りよがりで合気道に浸かるのでもなく、部員一人一人を大切にし、合気道部のどんなことも楽しむ心得が必要であると考えています。「後輩は部の宝」、「先輩にもらってきたものを後輩に与えていけばいい」。これらのことは我が部の先輩からいただいたお言葉ですが、振り返ってみるとこれが私の「軸」となっていたように感じます。

私はこの明治学院大学体育会合気道部で様々な経験をし、変化してきました。この4年間の経験は私の人生の軸となり、迷ったときにはきっとこの部活での経験を思い出すことでしょう。誰かに勝つためではなく、自分自身がどれだけのことをやってきたか、それを振り返りさらに上を目指すためには何をすればよいか考える、それが大切であると教えてくれた合気道部に出会えたことを私は幸せに感じます。

部紹介

一、部の正式名称	明治学院大学体育会合気道部
二、創部年	1956年
三、流派	鍊身会合気道
四、部役員	千田務師範
五、部員数	28名（男子14名・女子14名）
六、稽古時間	水曜日 15:05-18:00 金曜日 18:00-20:00 土曜日 12:00-15:00
七、道場	白金校舎、戸塚校舎
八、年間行事	4月 新入生歓迎デモンストレーション 5月 新入生歓迎会 6月 春季審査合宿 7月 春季昇級有段審査 8月 暑中稽古 9月 合気道鍊身会全国演武大会

1月	白金祭(学祭)演武会
2月	秋季審査合宿
3月	秋季昇級昇段審査 上智明学合同稽古
	卒業コンバ

明治大学体育同好会連合会合氣道部



主将作文

縦の繋がり

明治大学体同連合氣道部主将 中井 康瑛

主将を担う前後で、部に対する捉え方は大きく変化したようと思う。中でも大きく芽生えたのは、縦の繋がりの意識だ。

我が部は体育会のように、体育部の先生が監督を担う形式ではなく、先輩が監督を担っている。そして、運営の主体はあくまでも学生という位置付けだ。運営の裁量はほぼ学生に委ねられており、主に主将が稽古指揮を執る。土日になると、

様々な代の先輩方が仕事の合間を縫いながらも、稽古に参加し部員に指導して下さっている。稽古後は食事に誘って下さり、そこでは様々な悩みや相談事にものつて頂いている。普段は学生同士で関わる機会が多い中で、大変有難い存在だ。

主将の立場になつて以降、先輩方の支えがあつて始めて、この部は成り立つていると感じるようになつた。

先輩方に対する認識は恥ずかしながら、低学年時は土日稽古になるとおつかないOBが来るといった程度だつたと思う。主将になつて始めの頃でさえ、頼らずとも部の運営は学生幹部だけで済むつていけば良いのではないかという思い

が少なからずあった。

しかし、主将として部を運営していく日を重ねるにつれ、思うように上手くいかない部分を手助けして下さっている事や、部のホームページをリニューアルする際も豊富なアドバイスやご援助を頂くなかで、先輩方の存在が大きく感じられた。

意識の及ばない至る所で、多くの手が差し伸べられていた事を認識すると同時に、学生だけの力で満足の行く運営していくには限界があると悟った。

例えば、大会競技の参加費用を賄うにしても、大学の補助金だけでは十分とは言い難い。先輩方の援助がなければ、今より多くの部費を部員から集めざるを得なくなるだろう。金銭面で大きな不自由を感じることなく稽古に集中できる環境は、先輩方のご支援の上に成り立っている。

資金面に限らず、合氣道の技術向上や組織運営の継続も、学生間だけでは限界があるのでないだろうか。

こうした先輩方の存在が部の発展を支え、伝統を築くのだろう。

今日の創部50年の歴史ある伝統は、数々の先代の紡いでできた強固な縦糸が原動力となっている。自身が学生でいる

間は部の舵取り側であったが、引退後は後進の支えに携わっていきたい。

現役生活も残り僅かとなつたが、縦の繋がりに感謝し悔いなく全力で運営に邁進していこうと思う。

部紹介

八、年間行事	3月	5月	6月	9月	10月	12月	1月	春合宿
一、部の正式名称	明治大学体育同好会連合会合氣道部							
二、創部年	1969年							
三、流派	富木流							
四、部役員	師範 栗山直規							
五、部員数	36人(男子19人、女子17人)							
六、稽古時間	月 15時30分～17時 火 15時30分～17時 水 なし 木 なし	15時30分～17時 12時30分～14時30分 13時～17時						
七、道場	明治大学和泉キャンパス体育館柔道場							

横浜国立大学体育会合氣道部

主将作文



横浜国立大学体育会合氣道部、主将の安西です。現在、本学合氣道部では、師範の石黒先生のもと、部員達と共に日々稽古に励んでいます。人数は少ないながら、一人一人が向上心を持って互いに切磋琢磨しています。

私は、高校1年の時に合氣道を始め、現在大学3年なので約5年合氣道を続けていることになります。合氣道をしていらっしゃる方なら一度は経験したことがあるのではないかと思いますが、合氣道をしているとよく友人や知り合いに「へー、合氣道やってるんだ、なんか技かけてみてよ」と言われることがあります。高校の頃などはこの提案をされた時、私はとても困っていました。なぜなら、「技かけてみてよ」と言われ技を相手にかけるのですが大体の場合、技がうまくかからなかつたからです。そして当時の私は相手に技が効かなかつたのが悔しくて、今度こそ相手に効かせようとその技を相手にうまくかけられるようなるまで練習していました。しかし、最近は、「技かけてみてよ」と言われてもそこまで困らなくなりました。大学生になり、様々な技を学び高校の頃より相手に技をうまくかけられるようになったという理由もあり

ますが、そもそも合気道の本質が技を使って相手を制圧することではないということを知ったからです。

になりません。

石黒先生がよく仰る言葉に、『仕手受け一体』という言葉があります。『仕手受け一体』とは、仕手と受けが互いに気を合わせながら1つの技を完成させるというものです。つまり、1つの技をかけるときに仕手は受けの気を読み、受けも仕手の気を読み取り仕手に合わせて動かなくてはならないということです。それでは、実際に戦うときに意味ないのではないのかと考える人がいるかもしれません。確かに、技を磨きどんな場合でも対応できる技術を身につけるのも大事だと思います。しかし、前にも述べたとおり合気道はただ技術の向上に努めれば良いというものではないと私は思うのです。合気道の本質は争わないことだと思います。『仕手受け一体』という言葉にある通り、合気道は相手がいなくては成り立ちません。稽古の時、仕手と受けが互いに向き合うとき敵対する相手同士として向き合い思いやりなく稽古をしたのならそれは争いに近いものになってしまいます、お互が尊敬し合い自身を高めてくれる存在だと思います、お互いが相手に思いやりを持ちながら稽古をすればそれは争い

て稽古に臨めば、自ずと争いは避けられるのではないか、それが合気道をする上で一番大切なことなのではないかと私は考えます。今後も先生から教えていただき『仕手受け一体』の精神を忘れずに稽古に励んで行きたいと思います。

部紹介

一、部の正式名称 国立大学法人横浜国立大学体育会合気道部

二、創部年 平成15年

三、流派 養神館合気道

四、部役員 担当教官 中村達夫 教授

師範・監督 石黒行雄

主将 安西陸

五、部員数 7人 うち男子5名 女子2名

六、稽古時間（曜日、時間帯）

- ①水曜 19:30～21:00（横浜国立大学内柔道場）
- ②金曜 19:30～21:00（　　〃　　）
- ③土曜 17:00～19:00（久里浜道場）

七、道場

- ①・②横浜国立大学内柔道場
- ③久里浜道場（横須賀市立神明中学校武道館道場）

八、年間行事

春秋の年2回行われる大学祭に於ける野外演武

養神館合氣道全国演武大会への出場

横浜市合氣道連盟演武大会への賛助演武

早稲田大学合氣道部

主将作文

主将 山浦良弘

私が早稲田大学合氣道部主将に任命されてから八ヶ月が過ぎました。ここでは、私が主将である残りの四ヶ月間の稽古に向けて、その抱負を述べたいと思います。

現在、早稲田大学合氣道部では徒手乱取りと短刀乱取りという二つの乱取り法の両立を目指し、日々稽古を行っています。

簡単に概要をまとめると、徒手乱取りは素手対素手で定められた十七本の技を相互に掛け合うもので、短刀乱取りは素手対短刀で、短刀側が競技用のソフト短刀で突いてくるのに対し、素手の徒手側はそれを捌いて徒手乱取り同様の十七本の技を掛けるものとなっています。学生の大会で行われるのが短刀乱取りのみであるからか、私たち以外の学生団体では徒手乱取りあまり稽古されていません。それでも我々は徒手乱取りを、短刀乱取りと同程度に稽古しています。それはなぜか。

一見すると短刀乱取りの方が護身術の観点からより「合氣道的」なものに思われますが、実態はそうではありません。徒手側は短刀を捌くことに手一杯で、捌いてすぐに技を掛けるのは



非常に困難です。そのため、捌いた後は再度突かれないように

短刀側に組み付いて離れないようにするというのが常套手段になっています。

これでは富木合気道の重要なテーマである「柔道との差別化」はないがしろになってしまいます。一方、徒手乱取りは、間合いを守らせるようなルールが徹底されていて、また

相互に自由意思で技を掛け合うため、その隙が生まれやすく技が出やすい。以上から、私は徒手乱取りの方が、富木合気道の特質がより反映されていると考えています。

しかし、私は短刀乱取りに対しても強いこだわりを持っています。短刀乱取りの大会で、早稲田の合気道、すなわち徒手乱取りを重視した合気道の実力をアピールしたいと思うからです。具体的には、短刀を捌いてすぐに相手を崩し技を取る、そんな相手を圧倒するような試合をしたいと思っています。次の短刀乱取りの大会は九月の終わりなので、あと三ヶ月弱しかありません。これまで以上にがむしゃらになつて稽古をして、理想の合気道を体現できるよう頑張っていきます。

部紹介

一、部の正式名称 早稲田大学合気道部
二、創部年 1958年

三、流派

NPO法人日本合気道協会(俗称..富木合気道)

四、部役員
師範..佐藤 忠之
部長..志々田 文明
監督..谷繁 強志
コーチ..白岡 岳人
中村 俊介
鎌田 真氣

五、部員数 30名(男24・女6)
六、稽古時間 月~金 16:00~19:00

土 15:00~18:00

七、道場

早稲田大学早稲田キャンパス17号館地下1階合気道場

八、年間行事

4月	新入生勧誘活動、新歓コンバ
5月	関東学生合氣道新人競技大会、五大学合同稽古
6月	関東学生合氣道競技大会
7月	昇級・昇段審査、前期納会
8月	夏合宿
9月	全日本学生合氣道競技大会
10月	国際合氣道競技大会
11月	早慶合氣道定期競技会
12月	関東学生合氣道競技秋季大会、後期納会、昇級・昇段審査
1月	寒稽古
2月	勝浦連盟合宿
3月	昇級・昇段審査、春合宿

加 盟 校 連 絡 先

加盟校連絡先一覧

大阪商業大学合氣道部	577-0036	大阪府東大阪市御厨栄町 4-1-10
金沢大学体育会合氣道部	920-1164	石川県金沢市角間町
関西福祉科学大学合氣道部	582-0026	大阪府柏原市旭ヶ丘 3 丁目 11 番 1 号
京都産業大学 体育会合氣道部	603-8047	京都府京都市北区上加茂本山
近畿大学合氣道部	577-0805	大阪府東大阪市宝持 3-33-35
国士館大学合氣道部	195-0052	東京都町田市広袴町 844
上智大学体育会合氣道部	102-8554	東京都千代田区紀尾井町 7-1
成城大学合氣道部	157-0066	東京都世田谷区成城 6-1-20
専修大学体育会合氣道部	214-0033	神奈川県川崎市多摩区東三田 2-1-1
大正大学合氣道同好会	170-8470	東京都豊島区西巣鴨 3-20-1
拓殖大学麗澤会 体育局合氣道部	193-0085	東京都八王子市館町 815-1
中央大学学友会	192-0393	東京都八王子市東中野 742-1
体育連盟合氣道部		
帝京大学理工学部合氣道部	320-0351	栃木県宇都宮市豊郷台 1-1
天理大学体育総部合氣道部	632-0032	奈良県天理市杣之内町 1050
東京大学運動会合氣道部	113-0033	東京都文京区本郷 7-3-1
東京医科大学 体育会合氣道部	160-0023	東京都新宿区西新宿 6-1-1
東洋英和女学院大学 合氣道部	226-0015	神奈川県横浜市緑区三保町 32
富山大学体育会合氣道部	930-0887	富山県富山市五福 3190
明海大学合氣道部	279-0014	千葉県浦安市明海 1 丁目
明治学院大学 体育会合氣道部	108-0071	東京都港区白金台 1-2-37
明治大学体同連合氣道部	101-0062	東京都千代田区神田駿河台 1-1
山梨学院大学 体育会合氣道部	400-8575	山梨県甲府市酒折 2-4-5
横浜国立大学合氣道部	240-8501	神奈川県横浜市保土ヶ谷区常盤台 79-1
早稲田大学体育局合氣道部	169-0051	東京都新宿区西早稲田 1-6-1
全日本学生合氣道連盟	102-0091	東京都千代田区北の丸公園 2-3

日本武道館内

歷代幹部名簿

1期（昭和34年）	亀井静香	東京
2期（昭和36年）	井上強一	中央
3期（昭和37年）	若狭尾崎	中央
4期（昭和38年）	柳奥和浦	中央
5期（昭和39年）	大場吉岡卓也	中央
6期（昭和40年）	小沢川上太一	中央
7期（昭和41年）	芦田利昭	中央
8期（昭和42年）	金子正勝	専修
増田芳久	藤弘道	早稻田
西野充	西野	東京
中央	中央	田
会 委	副 委	副 委

9期（昭和43年）	川辺順一	明学
10期（昭和44年）	河内大塚誠一	明学
11期（昭和45年）	眞貝加来健一	成城
12期（昭和46年）	佐々木泰男	成城
会 委	副 委	副 委
記 涉 会 委	副 委	副 委
企 企 総 会 会 委	副 委	副 委
企 企 総 涉 会 委	副 委	副 委

13期（昭和47年）	宇田悦貴	吉田秀一
14期（昭和48年）	堀江良一	松井茂
15期（昭和49年）	森田泰弘	立花英昭
16期（昭和50年）	難波秀記	平井敏信
会 委	副 委	副 委
幹 企 涉 記 会 委	副 委	副 委
總 涉 副 委	副 委	副 委
幹 幹 總 企 涉 記	副 委	副 委

17期（昭和51年）	吉川英夫	半司知巳
18期（昭和52年）	竹下克美	藤田世潤
19期（昭和53年）	筑茂重仁	坂井豊
20期（昭和54年）	宮本正雄	小宮公則
会 委	副 委	副 委
記 總 幹 涉 記 會 委	副 委	副 委
總 企 幹 副 委	副 委	副 委
涉 總 會 委	副 委	副 委
会 副 副	副	副

三瓶美憲	公文寛朗	江藤尚志	寺川富啓	平野行孝	寺根宏	関根忠	寺戸	成城	専修	桜美林
2期										
(昭和58年)	(昭和57年)	(昭和56年)	(昭和55年)	(昭和54年)	(昭和53年)	(昭和52年)	(昭和51年)	(昭和50年)	(昭和49年)	(昭和48年)
大塚俊之	辻伸晃	増山輝義	大谷知未	上岡由起男	上溝武則	松沢毅	浅田穀	吉澤賢	根来俊久	古川浩之
拓殖	拓殖	拓殖	東京	東京	東京	中央	中央	中央	東京	東京
幹副	幹副	幹副	幹副	幹副	幹副	委	委	委	委	委

3期(平成4年)	3期(平成3年)	3期(平成2年)	3期(平成元年)
圖師守和	圖師守和	末廣丈男	辻伸吾
宇野達雄	蓮香正英	児玉晃治	神谷広幸
石川敦子	羽鳥秀介	鈴木美輝	伊藤敏郎
拓殖	関ひろ美	実石利宏	橋本拓治
專修	上智	葛山恵子	西尾努
上智	早稻田	木宏	山本征司
早稻田	中央	上智	上智
中央	東京	稻田	東京
中央	中央	稻田	拓殖
副	副委	副委	副委
副	副委	副委	副委
企	企	企	企

3期(平成7年)	3期(平成6年)	3期(平成5年)	3期(平成4年)
荒井剛 奥山英男 神谷以土子 鈴木克敏 高木恭子 田中茂樹 市丸徹 鶴沢義勝 小野寺公子	清水寿哉 田中樹 中村徹 上智 中央 拓殖 東京 拓殖 東京	矢口朋来 吉本薰 石川正和 中里見真理 中里清乃	宇野達雄 蓮香正英 石川敦子 但野端子
菅野貴裕 溝口義郎 千葉陽一 永田泰三	荒井剛 奥山英男 神谷以土子 鈴木克敏 高木恭子 田中茂樹 市丸徹 鶴沢義勝 小野寺公子	菅野貴裕 溝口義郎 千葉陽一 永田泰三	羽鳥秀介 関ひろ美 宇野達雄 蓮香正英 石川敦子 但野端子
専修 早稻田	幹 副 委 幹 副 委	上智 中央 拓殖 東京 拓殖 東京 中央 上智	上智 中央 拓殖 東京 拓殖 東京 中央 書
	会 委 会 委 会 委 会 委 会 委 会 委 会 委 会	總書會幹副委 總書會幹副委 總書會幹副委 總書會幹副委 總書會幹副委 總書會幹副委 總書會幹副委 會	早稻田 東京 中央 專修 上智

3期(平成8年)	7期(平成8年)	7期(平成8年)
小林賢一郎	櫻木淳一	岸本有臣
大畠千春	宮越亜佐子	安達愛
東京	東京	中央
明治	中央	中央
上智	東京	東京
幹副委	幹副委	幹副委
会副副委	書総幹副委	書副委
4期(平成11年)	4期(平成10年)	3期(平成9年)
丸田英徳	大西繁	河口大輔
永井祐介	小原圭介	植田修
野一色泰友	荒井美乃	大武美保子
村田英幸	井上和靖	守山美樹
増田与志子	大野久美子	
八波直登	川田晃	
増本浩		
井田篤志		
松浦妙子		
鈴木雄大		
荒川大地		
東京		
東京		
拓殖専修		
会副副委	書総幹副委	書副委

松村 中山章太郎	松村 中原桃絵	松村 武井
陽	絵	誠
4期(平成13年)	4期(平成13年)	4期(平成13年)
鈴木雄大 北条隆夫	松原誠 二見崇史	東京
増田賢司	木畠千端子	中央
鈴川真世	佐藤有紀	東京
五十嵐洋介	五十嵐洋介	拓殖
大内直人	百井美由紀	中央
犬塚彩	木宏治	上智
宮島望	大林直樹	東京
寺保美有紀	羽鳥敦	中央
4期(平成15年)	4期(平成15年)	4期(平成15年)
猪俣洋右 羽鳥敦	羽鳥敦	中央
糟谷綾子	斎藤智子	中央
北村真希子	佐藤友子	中央
外間実樹雄	久須美千晶	中央
専修	拓殖	中央
東京	中央	中央
渉	渉	渉
編	総幹	書企
総幹	副副	幹副
副副	委	副委

47期(平成18年)		46期(平成17年)		45期(平成16年)	
堀 稔也	永田 拓也	加藤 真弓	南山 泰之	戸田 昭平	前田 昭平
石幡 紗美子	永田 亮平	齊藤 敏道	浅田 真理	赤芝 有紀	片岡 伸
森田 宙花	森田 英治	柏原 一輝	福村 晃弘	横山 美尋	南山 泰之
五十嵐 俊輔	五十嵐 俊輔	杉山 純香	毛剛臣	五十嵐 俊輔	浅田 真理
五十嵐 奈央	五十嵐 奈央	石原 祐一	横山 美尋	横山 美尋	福村 晃弘
拓殖 央	拓殖 央	齋藤 敏道	上 雅俊	上 雅俊	南山 泰之
明治 央	明治 央	柏原 一輝	村 上 雅俊	村 上 雅俊	戸田 昭平
中 央	中 央	杉山 純香	加藤 真弓	加藤 真弓	前田 昭平
幹 委	幹 委	石原 祐一	五十嵐 俊輔	五十嵐 俊輔	五十嵐 俊輔
副 委	副 委	五十嵐 奈央	五十嵐 奈央	五十嵐 奈央	五十嵐 奈央
会 涉 編 総 涉 編 総 幹 委	会 涉 編 総 涉 編 総 幹 委	会 企 涉 編 総 幹 委	会 企 涉 編 総 幹 委	会 企 涉 編 総 幹 委	会 企 涉 編 総 幹 委

齊木佳奈	児玉朱美	大庭康裕	鍵元美穂	成田正一	橋枝俊	48期(平成19年)
黒瀧すずか	森元鷹志	木下清隆	小林数磨	大和田明子	石山誠之	50期(平成21年)
東京会	東京情	中央情	中央編	拓殖編	明治編	中央委
専修	専修	英和	英和	拓殖	明治	中央
中央	東京	東京	東京	英和	中央	東京
会	会	会	会	編	編	49期(平成20年)
情	情	情	情	名	名	50期(平成21年)
編	編	編	編	涉	涉	48期(平成19年)
小	大	石	中	酒	酒	大庭康裕
林	和	山	庭	井	井	鍵元美穂
下	田	誠	雅	拓	拓	成田正一
清	明	之	子	斗	斗	橋枝俊
鶴	子					
志						
木						
森						
下						
灌						
す						
か						

5期(平成22年)	小金井巧 西田健太郎	久万純平 平田高嗣	齊藤光雪 松井淳	藤牧あゆみ
4期(平成25年)	丸山貴之 北川なつき 近岡光 大久保莊一	中央 東京 副委 會	中央 東京 副委 會	中央 東京 副委 會
5期(平成24年)	中村義人 石田真将 多田啓人 渡邊康平 浅川拓哉 金内友里 青木那広	浜井優 河村麻梨子 青木真理恵 中田博之 楠見亮平 錢谷聖文	勝木洋臣 岩崎裕久 東京 東京 東京 東京 東京 東京	上里允隆 秋山摩利 拓殖 拓殖 拓殖 拓殖
3期(平成23年)	大久保莊一 東京 会	副委 會	副委 會	副委 會
2期(平成22年)	5期(平成25年)	編情涉名會副副委 •涉幹	情名編補會涉副副委 •涉幹	會編情名涉副副委 •涉幹

5期(平成26年)	56期(平成27年)	55期(平成26年)
望月淳平	高取慧	山本恵未 伊禮巧真 大川未紗子 落合成昭 河合慶太
岡田啓太朗	鈴木貴裕	中央
中西亮介	堀松知剛	専修
村中礼菜	福伊永花	拓殖
小島知樹	日野皓文	委員会
高石治	船木翔太	幹事會
三軒家綾香	東京	幹事會
武塚直也	東京	幹事會
岡田啓太朗	東京	幹事會
石井豪浩	東京	幹事會
拓殖	明治	幹事會
小早川みづき	明治	幹事會
三田眞貴子	拓殖	幹事會
石塚幹菜	中央	幹事會
塚田裕介	中央	幹事會
人見優斗	明治	幹事會
中田恵	中央	幹事會
専修	副編	幹事會
東京	副編	幹事會
東京	副編	幹事會
東京	副編	幹事會
編補	副編	幹事會
	副編	幹事會

河合萌子	東京	專修	明治	副委
中田恵	東京	專修	明治	副委
橋本佳奈実	東京	專修	明治	副委
八城裕樹	東京	專修	明治	副委
人見優斗	東京	專修	明治	副委
下地匡	東京	專修	明治	副委
中村達哉	東京	專修	明治	副委
59期(平成30年)	早稻田	中央	中央	名編
小川希生	東京	專修	副委	編
大島康輝	東京	專修	副委	編
遠藤功司	東京	專修	副委	編
今西浩人	東京	專修	副委	編
中村達哉	東京	專修	副委	編
笠谷佳範	東京	專修	副委	編
60期(平成31年)	早稻田	中央	中央	名編
飯塚浩祐	東京	專修	副委	編
藤本侑花	東京	專修	副委	編
迫本和也	東京	專修	副委	編
宮脇英佑	東京	專修	副委	編
森海翔	東京	專修	副委	編
笠谷佳範	東京	專修	副委	編
榮田由貴	東京	專修	副委	編
長繩礼香	東京	專修	副委	編
治郎丸諒	東京	專修	副委	編
幹広情	名編	副委	副委	副委
名会編	副委	副委	副委	副委
会編	副委	副委	副委	副委
会編	副委	副委	副委	副委

(注) 委員會內編總幹副委員人庄沙人畫名稱據補種

委員長	副委員長
幹事長	
総務	
編集	
涉外	
企画	
書記	
人事	
広報	
システム管理	
名簿	
情報管理	
会計補佐	
管財	

与那城竜太郎 専修 情

全日本学生合氣道連盟規約

全日本学生合気道連盟規約

施行 昭和三十四年

改正 平成二十年九月十日

第一章 総則

第一条（目的）

本連盟は学生間における合気道の普及発展と、連盟校相互の連絡並びに互いの親睦融和を図り、学生合気道の発展に寄与することを目的とする。

第二条（流派）

流派はこれを問わない。

第三条（名称及び事務所）

①本連盟は全日本学生合気道連盟と称する。
②本連盟は事務所を日本武道館内に置く。

第四条（事業）

本連盟は第一条の目的を達成する為に以下各号所定の事業を行う。

一、演武会

二、合同合宿

三、演武旅行、合同稽古、刊行物の発行

四、その必要と認められる諸事業

第五条（構成単位）

本連盟は各大学公認の合気道部、又は連盟委員会によつてこれに準ずると決議された合気道会の大学単位を以つて構成する。

第二章 加盟及び脱退

第六条の一（加盟）

①連盟加入に当つては、第七条に定める書類を事務所に提出しなければならない。

②新規加盟は連盟委員会による審議を経た後、十六条二項に定める議決により効力を発する。

七、加盟員名簿

八、その他必要と認められる諸事項

②前項の提出は、電磁的方法により行うことができる。

第三章 機関

第一節 総則

①本連盟は常時、第二節に定める連盟委員会を置く。

②本連盟は、必要と認める場合に顧問及び最高顧問を置く事ができる。

③前項顧問及び最高顧問は、連盟委員会の決議を経て、委員長がこれを委嘱する。

第九条（任期）

①任期は一年とする。但し任期中に交代する場合は、後任者の任期は前任者の残余の任期とする。

第十一条（最高顧問）

②再任はこれを妨げない。

第十二条（連盟委員会）

削除

第十三条（顧問）

削除

第十四条（最高顧問）

削除

第十五条（連盟委員会）

削除

①連盟委員会は、連盟の最高機関である。

②連盟委員会は、本連盟事業計画の立案及び実施を行う。

第十三条（構成）

①連盟委員会は、連盟委員によつて構成される。

②連盟委員は、加盟校より選出される。

③連盟委員会は、委員長一名、副委員長二名を定める。

④削除

第十四条（担当委員）

連盟委員会は、以下各号に定める担当委員を置く。

第四章 会計

第十九条（経費）

連盟の経費は、加盟費、分担金、寄付金、その他他の収入を以つて充てる。

第二十条（会計年度）

会計年度は毎年十一月に始まり、十月に終る。

第二十一条（予算）

第十五条（委員会）

①連盟委員会は毎月一回、定例委員会を開く。

②委員長が必要と認めた場合には、緊急委員会を召集する。

第十六条（定足数及び議決）

①連盟委員会は委員の三分の二の出席により成立する。但し、委任状も可とする

②連盟委員会の議決権は、各委員につき一票とし、議決は出席委員の過半数により成立する。賛否同数の場合は、委員長の決定するところによる。

第十三条（構成）

②連盟委員会の議決権は、各委員につき一票とし、議決は出席委員の過半数により成立する。賛否同数の場合は、委員長の決定するところによる。

第三節 任務

第十七条（任務）

①委員長は連盟を代表する。

②副委員長は委員長を補佐する。

第十八条（誠実義務）

連盟委員は任務を迅速かつ誠実に行わなければならぬ。

第十九条（会計）

連盟の経費は、加盟費、分担金、寄付金、その他他の収入を以つて充てる。

第二十条（予算）

予算は、会計担当委員が之を作成し、連盟委員会の承認を得る事を要する。

第二十二条（決算）

決算は、会計担当委員が之を作成し、連盟委員会の承認を得る事を要する。

第六章 改正

第二十三条（細則）

本規約の改正には、連盟委員総数の三分の二以上の同意を要する。

第二十四条の一（罰則規定）

連盟委員会は、以下各号に定める処分を行うことができる。

一、強制脱落

二、権利停止

三、警告

第二十四条の二（脱退）

①連盟委員会は、以下各号に該当する加盟校を、強制的に脱退させることができる。

一、連盟の威信を著しく傷つけた場合。

二、連盟の規約に違反した場合。

三、連盟と他団体の関係を著しく悪化させた場合。

四、その他不適当と認められる場合。

五、その他の不適当と認められる場合。

六、その他の不適当と認められる場合。

②脱退処分を行う場合には連盟委員会は直ちに調査委員会を組織し、之を調査することができる。

第二十五条（復権）

除名処分校の復権は、十六条二項に定める決議による。

編集後記

まず始めに、今年度の連盟誌を発行するにあたり、ご協力いただきました、先生方、O.B・OGの方々、加盟校の皆さんに、この場をお借りしてお礼申し上げます。また、例年より大幅に遅れた発行になりました。幹部をはじめとする連盟委員の皆さんには大変ご迷惑をおかけしました。

さて、今年は連盟結成六十周年ということで、連盟誌も記念号として発行することになります。その中で、過去数年分の連盟誌を振り返る機会を得ましたが、先生方はもちろん、各加盟校の方々の考え方方に触れられたことは大きな発見でした。皆様もこの体験をしていただけたよう、今回の記念号では十年前の五十周年誌とは違った形で記念事業を行いました。詳細は次ページで記載させていただきます。

「学生の学生による学生のための」を掲げる弊連盟の活動の一助となれば幸いです。

最後になりましたが、今後の加盟校及び全日本学生合気道連盟の益々の発展を心から願いまして、編集後記に代えさせていただきま

連盟誌 六十周年記念号

令和二年一月 十四日 発行

発行責任者 飯塚浩祐
編集責任者 宮脇英佑

発行所 千代田区北の丸公園二一三
日本武道館学生武道クラブ内
全日本学生合気道連盟

印刷所 スピード冊子印刷.com

電話 ○一二〇一九三九一八三四
<https://speed-books.com/>

第六十期編集責任者

宮脇英佑

六十周年に際して・QRコード

今年は弊連盟の六十周年の年になります。四十周年、五十周年の年ではそれ以前の連盟誌のバックナンバーをまとめて掲載し、記念号として発行することで皆さんに振り返りの場を提供しておりました。今年もその例に倣いますが、少々形を変えさせていただきます。

連盟結成五十周年である十年前との大きな違いは、社会のデジタル化がより進展していることです。誰もが電子機器を持ち歩き、インターネットにアクセスできる時代です。そこで私は過去の連盟誌を共有できる場を等しく提供したいと思い、過去の連盟誌をデジタルにすることを考えました。現在ネット上に連盟のホームページがあり、そこに過去十年分の連盟誌をPDFの形で置いてあります。

クリックひとつと下記のパスワードの打ち込みでそれらを見る事ができるということです。裏ページが透けている箇所がありますが、データとして残されていない連盟誌をスキヤナーで読み取りをしたためです。読む分には支障ないでしょうが、ご了承ください。

学生の皆さんのがより簡単に、頻繁に連盟誌に触れていただければ幸いです。

QRコードに関してはスマートファンなどでかざして読み取れば、ホームページに飛ぶことができます。一般に備わっているカメラアプリで問題ありません。



← 全日本学生合気道連盟ホームページのQRコード
HPのURL
: <https://aikido-renmei.github.io/hp/>

各連盟誌 pdf の password : budokan1959

※ブラウザは Google Chrome を推奨します。